

# 筑前國觀世音寺の構造とその性格について

平岡定海

## 一 觀世音寺の成立と諸国講讀師について

觀世音寺の成立、およびその推移については、かねてより、竹内理三氏が「筑前觀世音寺史―東大寺の末寺となるまで―」と題して、南都仏教第二号に発表されたもの<sup>(1)</sup>、および、高倉洋彰氏が「筑前觀世音寺史考」<sup>(2)</sup>として、述べられた論文によって明確にされているのである。ことに觀世音寺の造像、とくに「觀世音寺と不空羅南觀音像」<sup>(3)</sup>（錦織亮介）や、また寺域については、さきの高倉洋彰氏が「筑紫觀世音寺の調査とその成果―伽藍配置に関する新たな知見を中心に―」と題して<sup>(4)</sup>、考古学的な分野から種々検討を加えられている。

殊に竹内理三氏が觀世音寺についての詳細な検討の中で、觀世音寺が東大寺の末寺化した問題のなかで「東大寺末寺化は、東大寺側の積極的なはたらきかけによるものであることが察せられる」<sup>(5)</sup>と述べられ、高倉氏も「保安元年（一一二〇）に觀世音寺は東大寺の末寺となる。種々の原因があつたろうが、律令制の崩壊にともなう太宰府権力の衰退と、觀世音寺の莫大な経済力の掌握を目的とした東大寺の進出にしぼられる」<sup>(6)</sup>と述べられている。

いまこのことについて、觀世音寺の性格を寺院構造の方向から検討を加えると共に、いかなる理由によって、觀世音寺が東大寺の末寺化しようとする動きに応じたのか、そしてそのような可能性が觀世音寺側にも存在したのかどうかなどの問題に触れてゆきたいと考えるものである。

觀世音寺の創建については、斉明天皇七年（六六一）新羅と唐の連合軍が、百済を討つ軍を起したがために、百済への援軍を催して、斉明天皇が自から軍を西に進めたのであるが<sup>(7)</sup>この年に天皇が崩御されたため、天智天皇が斉明天皇の追善菩提のために創建されたのが、觀世音寺であると続紀和銅二年（七〇九）二月一日の条に述べている。

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

しかしこの寺の建立が直ちに始められたのではなく、かなりの年月を要して完成に到ったのである。和銅二年はその途中の経過を示したものである。

二月戊子朔。詔曰。筑紫觀世音寺、淡海大津宮御宇天皇奉爲後岡本宮御宇天皇誓願所基也。雖累年代、迄今未了。宜大宰・商量充ニ  
驅使丁五十許人、及逐閑月差發人夫、專加檢校、早令營作。<sup>(8)</sup>

そしてこの觀世音寺については、延喜五年（九〇五）の觀世音寺資財帳にその全容が示されているといっているものである。

つぎに寺院建立のための動きが見られるのは、天智天皇の時代ではなく、天武天皇の崩御の年の朱鳥元年（六八六）に筑前国百戸、筑後国百戸の合せて二百戸の封戸が施入され、その封戸充當の地は、のちに觀世音寺によって莊園化された筑前国嘉麻郡碓井郷（五十烟）、同鞍手郡金生郷（五十烟）と筑後国生葉郡大石郷（五十烟）、同山北郷（五十烟）であった。<sup>(9)</sup>

この寺の造営が初期において捗らなかったのは、その発願者が天智天皇であったがため、壬申の乱を発端として、天智・天武の仲が好ましくなかったことにより渋滞をきたし、文武天皇の大宝元年（七〇一）には近江国の志我山寺とともに五年間に造営の見込みがつかないならば寺封を停止するという制限が加えられていた。<sup>(10)</sup>

このような状況から考えて、觀世音寺の成立は大宝二年（七〇二）以後の大宰府の処置により急ぎ具体化されたと考えられる。

この大宰府とは、「ツクシノオホミコトモチノツカサ」と称し、中国・朝鮮へ出てゆく遣隋使・遣唐使・遣新羅使の出発の基点であったと同時に、大宰府を含んだ筑前国は「元成ニ辺賊之難也。其峻城深隍、臨海守者、豈為内賊耶。」<sup>(11)</sup>と外敵を防ぐ最前線であった。そしてそのため天智七年（六六八）には栗前王が筑紫率に任ぜられている。<sup>(12)</sup> また十年（六七二）六月には筑紫師に昇り、十一月に対島国司より使を「筑紫大宰府」に使用して唐商人の郭務棕等が二千人の人数で四七隻の艦を以て筑紫に到ることを報じているが、これが大宰府の初見ともいわれ、筑紫大宰府は、対外関係と対内的には筑紫国守を兼ねていたと見るべきであろう。そして天智天皇三年（六六四）に築かれた筑紫の水城を守ることも重要な使命であった。持統天皇三年（六八九）には浄広肆河内王を筑紫大宰師として兵杖を授けて、大宰府を強化し、遣新羅使・留学僧・新羅送使等の饗応や接待に応ずるとともに防人の監督にも当たっていたのである。

大宰府は令義解の職員令によると

大宰府帶<sup>ム</sup>筑前國<sup>ヲ</sup>。

主神一人。掌<sup>ル</sup>諸祭祠事<sup>ヲ</sup>。帥一人。掌<sup>ル</sup>祠社、戸口、薄帳、字<sup>シ</sup>養百姓<sup>ヲ</sup>、勸<sup>メ</sup>課農桑<sup>ヲ</sup>、糾<sup>シ</sup>察所部<sup>ヲ</sup>、貢舉、孝義、田宅、良賤、訴訟、租調、倉廩、徭役、兵士、器仗、鼓吹、郵驛、傳馬、烽候、城牧、過所、公私馬牛、闌遺雜物、及寺、僧尼名籍、著客、歸化、謂遠方之人歟、謂遠方之人歟、饗饗事。大貳一人。掌<sup>ル</sup>同帥<sup>ニ</sup>。少貳人。掌<sup>ル</sup>同大貳<sup>ニ</sup>。

大宰帥を中心として、大貳・少貳・大監・少監・大典・小典・大判事・少判事・大令史・少令史・大工・少工・博士・陰陽師・医師・竿師・防人・裕・令史・主船・主厨・史生等、総員五十人を数え、大宰府は筑前国のみならず筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向・薩摩・大隅の九国と壹岐・対馬二島の管理にあたった。文徳実録によれば

夫大宰府者、西極之大壤、中國之領袖也。東以<sup>ニ</sup>長門<sup>ニ</sup>爲關、西以<sup>ニ</sup>新羅<sup>ニ</sup>爲拒。加以、九國二嶋、郡縣闊遠。自古<sup>ノ</sup>今、以爲<sup>ニ</sup>重鎮<sup>ニ</sup>。夫謀<sup>ル</sup>事以就<sup>ル</sup>租。發<sup>ル</sup>政占<sup>ニ</sup>古語<sup>ヲ</sup>、因<sup>レ</sup>檢<sup>ニ</sup>舊記<sup>ニ</sup>、大唐高麗新羅百濟任那等悉託<sup>ニ</sup>此境<sup>ニ</sup>。乃得<sup>ニ</sup>入朝<sup>ニ</sup>。或緣<sup>ニ</sup>貢獻之事<sup>ニ</sup>、或懷<sup>ニ</sup>歸化之心<sup>ニ</sup>、可<sup>レ</sup>謂<sup>ニ</sup>諸藩之輻湊<sup>ニ</sup>、中外之關門<sup>ニ</sup>者也。因<sup>レ</sup>茲有德爲<sup>ニ</sup>帥貳<sup>ニ</sup>、才良爲<sup>ニ</sup>監典<sup>ニ</sup>。

朝鮮半島の新羅からの使者や中国の使者までここを通り、また西国の重鎮であったから、ここを支配した藤原広嗣などは朝廷に抗する拠点とすることができたほどであった。

このような地理的条件のもとにあった大宰府にあって、大宝二年（七〇二）頃より遣唐使の往還が盛んとなって、その航行の安全と、風向待や外国の使者接待のためにも和銅二年（七〇九）には「雖<sup>レ</sup>累年代、迄<sup>レ</sup>今未了<sup>ニ</sup>」<sup>(16)</sup>として放置されていた観世音寺の造営をいまや大宰府をして促進させる必要が生じたのであった。

そしてその資財に充てるために筑後国十六町（三原郡三町・生葉郡四町・竹野郡四丁）、筑前国十二町三百三十六歩（那珂郡三反百卅歩・嘉麻郡六町四反・穂浪郡六町）の熟田を施入されることとなった<sup>(17)</sup>。しかしこの寺院の完成には単に資財を投じて、それを管理する僧侶を見出さないかぎり無用の長物と化する憂いがあった。

ところが、大伴家持の父の旅人が養老三年（七一九）二月に大隅国守陽侯史麻呂が隼人により殺され乱を起したとき、征隼人持節大將軍を命ぜられて、授力を従五位下笠朝臣御室に命じ、九州に下向してより、大伴旅人は天平二年（七三〇）大納言に任ぜられて帰京するまで大宰府に

筑前國観世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

あり、神龜五年（七二八）より天平二年までの三年間は大宰帥であった。そのとき彼が引つれていった筈朝臣の一族から、のちに觀世音寺を開いた満誓が出た。

この大伴旅人は、元明天皇の即位した康雲四年（七〇七）より、美濃守、木曾路の開拓、尾張守と昇進し、また養老三年（七一九）七月始めて按察使が置かれたとき尾張・三河・信濃の三カ国を管するなど、なみなみならぬ元明天皇の寵愛を受けた。また、天皇の養老五年（七二一）の不予に際して、諸寺の併合があわせて行なわれた。

（丁未朔三）五月己酉。太上天皇不豫。大<sub>ニ</sub>赦天下<sub>一</sub>。辛亥。令<sub>下</sub>七道按察使及大宰府、巡<sub>ニ</sub>省諸寺<sub>一</sub>、隨<sub>レ</sub>便併合。壬子。詔曰。太上天皇、聖體不豫、寢膳日損、每<sub>レ</sub>至<sub>ニ</sub>此念<sub>一</sub>、心肝如裂。思<sub>フ</sub>歸<sub>ニ</sub>依<sub>一</sub>三寶、欲<sub>レ</sub>令<sub>下</sub>平復。宜<sub>下</sub>簡<sub>ニ</sub>取淨行男女一百人<sub>一</sub>、入道修<sub>レ</sub>道。經<sub>レ</sub>年堪<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>師者、雖<sub>レ</sub>非<sub>ニ</sub>度色<sub>一</sub>、並聽<sub>レ</sub>得度。以<sub>ニ</sub>絲九千鈞<sub>一</sub>施<sub>ニ</sub>六郡門徒<sub>一</sub>、勸<sub>ニ</sub>勵<sub>一</sub>後學、流<sub>ニ</sub>傳<sub>一</sub>万祀。戊午。右大弁從四位上筈朝臣麻呂。請<sub>下</sub>奉<sub>ニ</sub>爲太上天皇出家入道<sub>一</sub>。勅許<sub>レ</sub>之。

その時、筈朝臣麻呂（満誓）は元明天皇の追善のために得度して、以前よりの天皇の寵愛に報いるためにも、発願出家して、養老三年より大宰府に下つていた旅人のもとにあった筈朝臣御室をたより大宰府に到らんことを願がい、許されて造筑紫觀世音寺別当となつて、この寺の造営に従事することになったと考えられるのである。ことに大伴旅人も元明天皇の不豫の報に接して歌を詠じて弔問している。

大宰帥大伴卿の、凶問に報ふる歌一首

禍故重疊し、凶問累集す。永に崩心の悲しびを懷き、獨り斷腸の泣を流す。但し兩君の大きなる助に依りて、傾命を纔に繼げらくのみ。

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり

神龜五年六月二十三日

この世間を無常と觀じ「四聖の起滅は夢の皆空しきがごとく、三界の漂流は環の息まぬが喩し」と嘆じた旅人は、その歎きを満誓と共にすることができたのであるから、旅人は満誓が下向して觀世音寺の造営に尽力することを嬉んで受けいれたと考えられるのである。

満誓もまた

沙彌滿誓、綿を詠ふ歌一首 造筑紫觀世音寺別當、俗姓筈朝臣磨といふ

しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは著ねど暖かに見ゆ

### 沙彌滿哲の歌一首

世間を何に譬へむ朝びらき漕ぎ去にし船の跡なきがごと

### 造筑紫觀世音寺別當沙彌滿哲の歌一首

鳥總立て足柄山に船木伐り樹に伐り行きつあたら船材を

筑紫は住みよい処と考え、都の生活は漕ぎにし船の跡なきが如くに思い出の彼方に消え、いまは觀世音寺造營のための用材の調達に心をくばるといふ立場にあったことを示している。

このため觀世音寺の造營は滿哲の努力によりかなり推進されたと見られる。そして養老六年（七二二）より勅して造觀世音寺別當となった沙彌滿哲は、天平三年（七三一）にはこの寺院の組織として、三綱の職掌を整え、安居のための伎樂具の施入を見たのであった。<sup>(23)</sup>しかし觀世音寺の如き、府大寺と称するような大宰府にとつての重要な伽藍は短時日に決して完成するものではなかった。天平十年（七三八）に五年を限って食封一百戸を与えられたが、<sup>(24)</sup>まだ伽藍を整えるには到らず、玄昉が入唐して帰国後、宮中内道場に進出して、光明皇后等に則天武后の中国での弥勒大仏造像等の例を示して、東大寺大仏の造像の促進を訴え、勢力日々に盛なることを求めたが、この玄昉の内道場進出を嫉んで乱を起した藤原廣嗣の叛乱後、彼もまた妖僧としてしりぞけられて觀世音寺の造營に携わることになってやっとこの寺が完成に近づいたのである。

この玄昉について扶桑略記抄は

流俗相傳云玄昉法師、大宰府觀世音寺供養之日、爲其導師。乘<sub>二</sub>於腰輿<sub>一</sub>供養之間、俄自<sub>二</sub>大虛捉<sub>一</sub>捕其身、然失亡。後日、其首落<sub>二</sub>置<sub>一</sub>于興福寺唐院<sub>二</sub>上<sub>一</sub>。<sup>(25)</sup>

とのべて玄昉が觀世音寺落慶の導師をつとめたとき、天より彼の首級を奪って南都興福寺唐院に落したという伝説をかかげている。この史実については全く信を置くことはできないけれども、少くとも玄昉が觀世音寺の造營に携わった頃には伽藍が次第に整い、落慶への道も開けていたであろうと推察できるのである。しかし玄昉による造營が果して行なわれたのかどうか、またその成果については全く知ることができない。

しかし觀世音寺の伽藍の内容については、延喜五年（九〇五）の「筑前國觀世音寺資財帳」に待たなければならない。これは觀世音寺當局が

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

大宰府に対して上申したもので、観世音寺講師・読師が署判を加わえ、三綱がこれを証明し、伽藍・仏像・經典・寺領より奴婢の員数にいたるまで詳細に記載され、大宰府の証判として「大宰之印」が押されている。この資財帳はこの寺の三綱のみでなく、国師と大宰帥が立会いであり、いち実物を検知して明瞭に記載することにとめている。そしてこの観世音寺資財帳は、貞観九年（八六七）六月十一日に作成された安祥寺伽藍縁起資財帳、同十五年（八七三）広隆寺資財帳、元慶七年（八八三）九月十五日、河内国観心寺縁起資財帳につぐものであって、これらの資財帳の作成にあたって共通している項目は、一、佛物、二、法物、三、常住僧物、四、通物、五、樂具、六、水陸田、七、雜公文、八、別院に分類されていて、これは延暦十七年（七九八）正月二十日の官符に基づいて作成された多度神宮寺伽藍縁起資財帳の佛物、塔、宝物、布薩、樂具、僧物、通物、墾田等の分類とも共通したものがある。そのような例から考えても、資財帳はまず最初に佛像、經典、常住僧物の三宝物をあげ、ついで伽藍を維持するための、陸田、墾田等を記載する定めとなっていたと考えられる。しかし元慶七年（八八三）の観心寺の記載例では、最初に伽藍の建築物をあげ、ついで佛像等を記している。もちろん寺院によって多少の異同はあるが、その源流は奈良時代の寺院縁起并流記資財帳の記載例をもとにして作成されているといえるのである。<sup>(26)</sup>

この延喜五年の観世音寺資財帳では、章を分けて、塔物・通物・用器・佛殿・僧客房・佛経・佛物・法物・観世音菩薩物・聖僧物・通三宝物・塔物・布薩物・常住僧物・温室物・通物・伎樂・用器・鋪設・大衆物に分かれている。

その伽藍配置の特徴については高倉氏が詳細に「筑紫観世音寺史考」で述べられている如く、寺領の四至とも関連させながら考えてゆくと、北を大野城南城外の遠賀門下道、東を大野川（御笠川）、南を五条大路ないしは大野川、西を大宰府の学校院との境である松岳と学校院東小路を結ぶ線として、伽藍は西の学校院との境界および南の五条大路が金堂と塔の中心を結ぶ東西線と講堂・中門・南大門を貫ぬく寺の中軸線との交点より、それぞれ一・五町をはかる点が注目され、寺域は方三町を示しているという調査報告がなされている。<sup>(27)</sup>

そこに三十七余の堂宇が建ちならび、寺域の中央には講堂と中門が廻廊で結ばれ、その内側に東に五重塔、西に東面金堂が配されている。その伽藍形態は天智天皇のときからの堂塔配置は飛鳥時代よりの流れを受けて、廻廊内に金堂と塔を左右に並べて、うしろに講堂を置く方式をとった川原寺（弘福寺）や大官大寺、崇福寺の様式を具えているといえるのである。<sup>(28)</sup>

伽藍には南大門、中門、四面廻廊、五重塔、金堂、講堂、鐘楼、菩薩院、戒壇院、大房（僧房）、小子房（僧房）、客僧房、経藏、倉、竈屋、

水屋、備屋、碓屋、政所院等が存在し、金堂の本尊は丈六の二脇待を安置し、四方に四天王を配した阿弥陀如来坐像で銅鑄仏であった。また講堂には捨像（塑像）の不空羅索観音を安置し、菩薩院には十一面観音画像をかかげていた。のちの康治二年（一一四三）の観世音寺燈油料・恒例佛事料等相折勘文のときは金堂には阿弥陀如来、講堂には聖観音、不空羅索観音、十一面観音、杵島観音（聖観音）、弥勒菩薩、文殊菩薩、新造阿弥陀如来、新造馬頭観音、吉祥天等が安置され、講堂が観世音寺の本堂のような景観が存在していたと考えられる。また五重塔には中尊として金銅阿弥陀如来像が安置されていた。

この寺が金堂の弥陀佛より観世音菩薩を中心に創立されたということは寺名からも明らかであるが、その理由については、天平十二年（七四〇）九月の藤原広嗣の乱に、

勅<sup>シテ</sup>四畿内七道<sup>ノ</sup>諸國<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>。比來緣<sup>リテ</sup>筑紫境有<sup>ニ</sup>不軌之臣<sup>ノ</sup>。命<sup>シテ</sup>軍討伐<sup>ス</sup>。願<sup>クハ</sup>依<sup>テ</sup>聖祐<sup>ニ</sup>欲<sup>ス</sup>安<sup>ニ</sup>百姓<sup>ヲ</sup>。故今國別造<sup>ニ</sup>觀世音菩薩像壹軀高七尺<sup>ナ</sup>。并寫<sup>ニ</sup>觀世音經一十卷<sup>ヲ</sup>。

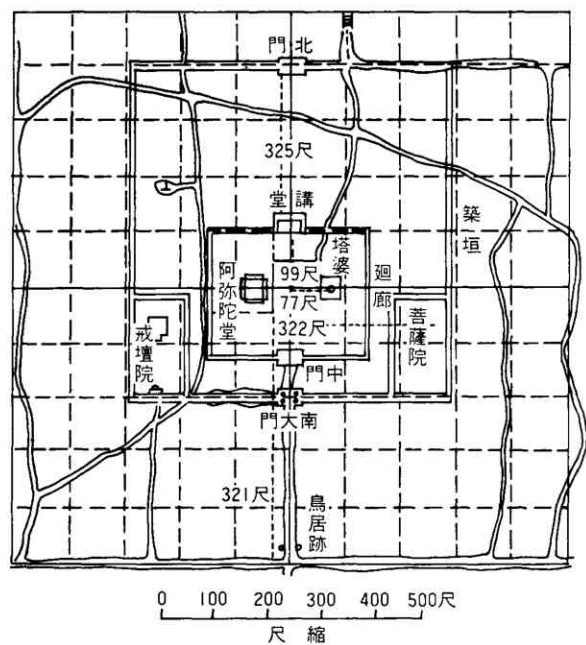
諸國に修羅道を司る観音像（七尺）を造らしめたことなどは、対新羅征伐の戦勝を祈願する

ための大宰府内の府大寺である意義をより明らかにしているとも考えられるのであり、とくに中央の仏教界の政治僧として宮中内道場を中心として活躍した玄昉や道鏡が、ともに東大寺の戒壇と関係ある筑紫観世音寺と下野薬師寺に配されたのは、偶然ともいえるが、案外、良弁等の指示により罪科を軽減し、両寺の造立と戒壇院建立の促進方をはかった処置であったのかも知れないと考えられるのである。

観世音寺はまた呉楽等演じて、渡来人に対する接待所的な性格も帯びていて、天平十年（七三八）頃より五年を限って食封一〇〇戸がこのために与えられ、五百町の墾田が追加された<sup>(32)</sup>。そして玄昉の左遷をもって天平十八年（七四五）に伽藍の完成を見るに到ったのである。

そのことはまた天平十三年（七四一）三月廿四日の国分寺創建の詔、つづいて天平十五年（七四三）東大寺大仏造願の詔を出されることにより、筑前国観世音寺と下野薬師寺は次第に脚光をあびてきたともいえるのである。

すなわち「乙巳。定<sup>ム</sup>諸寺墾田<sup>ノ</sup>地限<sup>ヲ</sup>。大安<sup>ニ</sup>。薬師・興福・大倭國法華寺・諸國分金光明寺、寺別<sup>ニ</sup>一千町。大倭國國分金光明寺四千町。元興寺二筑前國観世音寺の構造とその性格について



筑前國観世音寺の構造とその性格について



観世音寺絵図



千町。弘福・法隆・四天王・崇福・新藥師・建興・下野藥師寺・筑紫觀世音寺・寺別五百町。諸國法華寺。寺別四百町。自餘定額寺、寺別一百町。」と墾田が配分され、ついで大佛造願事業が着々と進み、そのうえ陸奥國産金の慶事が報ぜられるについて、諸國諸寺の復興を進めるために墾田が盛んに施入されることになった。觀世音寺に対してもこのとき五百町が与えられた。

大宰府 牒國師所

觀世音寺

右寺、伍伯町、<sup>(百)</sup>

諸國國分金明明寺<sup>(光)</sup>

右寺、壹仟町、

諸國國分法華寺

右寺、肆伯町、<sup>(百)</sup>

自餘定額寺

右寺別、壹伯町、<sup>(百)</sup>

牒、被治部省去七月十九日符稱、被太政官今<sup>(備下同シ)</sup>符稱、奉今月一日勅稱、去四月一日詔書、寺寺墾田地許奉者、宜依件數施行者、省宜

承知、准勅施行□、府宜承知、准狀施行者、宜知此狀、准狀施行、今以狀牒、至准狀、故牒、

天平勝寶元年九月廿九日從七位上行少典茨田宿祢 五百村少貳從五位下小野朝臣田守<sup>(34)</sup>

ここでつぎに注目しなければならないのは、国師についてである。もともと国師が諸國に置かれるようになったのは大宝二年(七〇二)二月二十日に「任<sup>(35)</sup>諸國国師」に始まって、靈龜二年(七一六)には諸國の寺院が荒廃にまかせ廃寺統合の必要が生じ、ここに国師・衆僧・檀越の協力を得て寺院の財物田園の検断を行っている。

詔曰。崇<sup>メ</sup>饒<sup>ル</sup>法<sup>ハ</sup>藏<sup>ヲ</sup>、肅<sup>シ</sup>敬<sup>ス</sup>爲<sup>レ</sup>本、營<sup>ル</sup>修<sup>ハ</sup>佛<sup>ハ</sup>廟<sup>ヲ</sup>、清<sup>シ</sup>淨<sup>ス</sup>爲<sup>レ</sup>先。今聞<sup>ク</sup>諸<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>寺<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>、多<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>法<sup>ノ</sup>。或<sup>ハ</sup>草<sup>ノ</sup>堂<sup>ヲ</sup>始<sup>メ</sup>闢<sup>ス</sup>、爭<sup>ニ</sup>求<sup>メ</sup>額<sup>ヲ</sup>題<sup>ス</sup>。幢<sup>ノ</sup>幡<sup>ヲ</sup>僅<sup>ニ</sup>施<sup>セ</sup>、卽<sup>チ</sup>訴<sup>フ</sup>田<sup>ノ</sup>畝<sup>ヲ</sup>。或<sup>ハ</sup>房<sup>ノ</sup>舍<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>脩<sup>メ</sup>、馬<sup>ノ</sup>牛<sup>ヲ</sup>羣<sup>レ</sup>聚<sup>ス</sup>、門<sup>ノ</sup>庭<sup>ヲ</sup>荒<sup>シ</sup>廢<sup>ス</sup>、荊<sup>ノ</sup>棘<sup>ヲ</sup>弥<sup>シ</sup>生<sup>ス</sup>。遂<sup>ニ</sup>使<sup>メ</sup>無<sup>シ</sup>上<sup>ノ</sup>尊<sup>ノ</sup>像<sup>ヲ</sup>。永<sup>ニ</sup>蒙<sup>ル</sup>塵<sup>ノ</sup>穢<sup>ヲ</sup>、甚<sup>ニ</sup>深<sup>ニ</sup>法<sup>ノ</sup>藏<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>免<sup>ス</sup>風<sup>ノ</sup>雨<sup>ヲ</sup>、多<sup>ク</sup>歷<sup>ス</sup>年<sup>ノ</sup>代<sup>ヲ</sup>、絶<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>構<sup>ノ</sup>成<sup>ヲ</sup>。於<sup>レ</sup>事<sup>ノ</sup>斟<sup>ニ</sup>量<sup>ス</sup>、極<sup>ニ</sup>乖<sup>ニ</sup>崇<sup>ニ</sup>敬<sup>ス</sup>。

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

今故併<sup>ニ</sup>兼數寺<sup>ヲ</sup>、合成<sup>ニ</sup>一區<sup>ト</sup>。庶幾<sup>クハ</sup>、同<sup>シテ</sup>力共造<sup>ラニテ</sup>、更興<sup>ニ</sup>。顏法<sup>ヲ</sup>諸國司等。宜<sup>ク</sup>明告<sup>ニ</sup>國師衆僧及檀越等<sup>ニ</sup>。條<sup>ニ</sup>錄部内寺家可<sup>レ</sup>合并<sup>ス</sup>財物、附<sup>テ</sup>使奏聞<sup>ヲ</sup>。又聞<sup>ク</sup>、諸國寺家、堂塔雖<sup>モ</sup>成<sup>ルト</sup>。僧尼莫<sup>ク</sup>住<sup>スルコト</sup>、禮佛無<sup>シ</sup>聞<sup>クコト</sup>。檀越子孫、惣<sup>ニ</sup>攝田畝<sup>ヲ</sup>、重養<sup>ニ</sup>妻子<sup>ヲ</sup>。不<sup>レ</sup>供<sup>セ</sup>衆僧<sup>ニ</sup>。因作<sup>ニ</sup>諍訟<sup>ヲ</sup>、誼<sup>ニ</sup>擾國郡<sup>ヲ</sup>。自<sup>レ</sup>今以後、嚴<sup>ニ</sup>加<sup>ニ</sup>禁斷<sup>ヲ</sup>、其所有<sup>スル</sup>財物田園、並<sup>ニ</sup>國師衆僧及國司檀越等相對檢校<sup>シテ</sup>。分明案記<sup>シテ</sup>、充用之日、共判出付<sup>ス</sup>。不<sup>レ</sup>得<sup>テ</sup>依<sup>テ</sup>舊檀越等<sup>ニ</sup>。專制<sup>ス</sup>。<sup>(36)</sup>

諸國の寺院の取扱いについては、原則としては國司の職制のなかに国内の寺および僧尼名籍のことを掌ることになっているけれども、聖武天皇等の仏教重視の政策により、國司より実務において寺院の処理等に当っては國師の関与することが多くなって来て、寺院の所有する田園財物を管理して、たとえ檀越といへども寺院財物に対する専断は許されるものではなかった。このような國師の權威は國分寺が発足すると、國司と共に寺地を簡んで經營に携わることになった。しかし國分寺建立について諸國司が必ずしも協力したとは考えられず、その国々の経済的条件も早急にこの目的を達成するには到っていないのである。

詔曰<sup>ク</sup>。朕以<sup>テ</sup>去<sup>ル</sup>天平十三年二月十四日、至<sup>リテ</sup>心發願<sup>シテ</sup>、欲<sup>シ</sup>使<sup>ニ</sup>國家永固<sup>ク</sup>、聖法恒修<sup>ニ</sup>。遍<sup>ニ</sup>詔<sup>シテ</sup>天下諸國、々<sup>々</sup>別令<sup>ニ</sup>造<sup>ラセ</sup>金光明寺・法華寺<sup>ヲ</sup>。其金光明寺各造<sup>ニ</sup>七重塔一區<sup>ト</sup>、并寫<sup>シテ</sup>金字金光明經一部、安置<sup>シテ</sup>塔裏<sup>ニ</sup>。而諸國司等怠緩<sup>シテ</sup>不行<sup>フ</sup>、或處寺不<sup>レ</sup>便<sup>ナラ</sup>、或猶未<sup>レ</sup>開<sup>ケ</sup>基<sup>ヲ</sup>。以爲<sup>テ</sup>天地災異<sup>ノ</sup>一二顯<sup>レ</sup>來<sup>ルコト</sup>。盖由<sup>レ</sup>茲乎<sup>ニ</sup>。朕之股肱豈合<sup>レ</sup>如此<sup>ノ</sup>。是以差<sup>ニ</sup>從四位下石川朝臣年足<sup>ヲ</sup>、從五位下阿倍朝臣小嶋、布勢朝臣宅主等<sup>ヲ</sup>。分<sup>ニ</sup>道發遣<sup>シテ</sup>、檢<sup>シテ</sup>定<sup>シ</sup>寺地<sup>ヲ</sup>。并察<sup>ニ</sup>作狀<sup>ヲ</sup>。國司宜<sup>ク</sup>与<sup>ニ</sup>使及國師、同定勝地<sup>ヲ</sup>。勤<sup>ニ</sup>加營繕<sup>ヲ</sup>。又任<sup>ニ</sup>郡司勇幹堪<sup>ヲ</sup>。一<sup>ニ</sup>濟<sup>ニ</sup>諸事<sup>ヲ</sup>。車令<sup>ニ</sup>主當<sup>ス</sup>。限<sup>ニ</sup>來三年以前<sup>ニ</sup>、造<sup>ラセ</sup>塔金堂僧坊<sup>ヲ</sup>。悉皆令<sup>レ</sup>了<sup>ス</sup>。<sup>(38)</sup>

ことに國分寺は光明皇后と武智麻呂の協力のもとに不比等の財源を費してまでも造営に力を入れたのであって、わが国の則天武后たらんとする光明皇后の意欲も盛んであったが、在地に於ける問題としては國司が主催して、國使を派遣して國師と共に適地を求め營繕をはじめ、その決定された寺地の上に、郡司が郡内の労力を動員して天平二十一年までに完成させることを約束させることになって、國分寺の詔を出して九年、約十年での目途を立てる必要にせまられたのである。しかしこの國師は國分寺や在地の寺院の經營に従事するといっても、僧綱の支配を別に受け、寺院の三綱と國司とのパイプ役まで与えられ、「今聞<sup>ク</sup>、國師赴<sup>リ</sup>任之日、受<sup>ニ</sup>得<sup>ニ</sup>官符<sup>ヲ</sup>、解任之時國司先<sup>ニ</sup>狀<sup>ヲ</sup>」<sup>(39)</sup>と國師は在國に赴くとき治部省に通知するも、解任のときには國司に報告しないなど、國師と國司の連絡の不充分なことは、國分寺の運営にも影響を与え十分に効果を發揮したとはいえないであろう。

またさきの太政官符に見られるごとく、観世音寺の壱田五百町の施入については、まず国師所に通達してその施行をうながしているのが、大宰府にある国師所は観世音寺のほか、九国二嶋の国分寺及び定額寺を統括していたのであり、観世音寺が筆頭に書かれていることは、この寺が、天平七年（七三五）に

勅曰。如聞。比日大宰府疫死者多、（中略）府大寺及別國諸寺、讀ニ金剛般若經。<sup>(40)</sup>

と天然瘡の流行を憂えて金剛般若経を読ませたという府大寺は観世音寺を指すのであろう。そのことはいまの太政官符でも国分二寺より上位に寺名を明らかにしていることでもわかるのである。

そして壱田の割当ては、のちの東大寺に当たる大倭国々分金光明寺の四千町は別として、元興寺（二千町）、大安寺、薬師寺、興福寺、法華寺および諸国国分寺（一千町）、弘福寺、法隆寺、四天王寺、崇福寺、新薬師寺、建興寺、下野国薬師寺（五百町）、諸国法華寺（四百町）等の中に組込まれ、四天王寺や、新薬師寺と同等の地位にまで高められた。ちなみに下野薬師寺については天平十年（七三八）の駿河国正税帳に「下野国造薬師寺司宗藏<sup>上</sup>一口、助僧<sup>二</sup>口<sup>(41)</sup>」とあることから天平十年頃より造られ「件寺者、天武天皇所ニ建立ニ也、坂東十国得度者盛萃ニ此寺ニ受戒、今尋ニ建立之由、与ニ大宰観音寺ニ揆也<sup>(42)</sup>」とあって、観世音寺と薬師寺はこの時に対当の地位を与えられたと考えることができる。

そして天平宝字五年（七六一）正月廿一日に、

勅曰。東山道信濃國以ニ坂東國々々、以ニ下野國薬師寺ニ爲ニ戒壇院<sup>(43)</sup>。西海諸國、以ニ筑紫観世音寺ニ爲ニ戒壇院<sup>(44)</sup>。

これは東大寺戒壇が天平勝宝七年（七五五）といわれているから、それより六年後にあたって、東西の戒壇道場が開かれたことになる。<sup>(44)</sup>

奈良時代、大宰府は藤原広嗣の乱により、天平十四年（四七二）に一端廃止され、筑紫鎮西府と称したが、同十七年に再び復した。そして観世音寺も府大寺として、また西国戒壇の重鎮として九国二嶋に君臨すると共に、西海諸国にその威光を示すために伽藍の造営と造仏による内容の充実をはかり地位を安定さす必要が生じたのである。

もともと奈良時代における国師制は大国師、小国師とに分かれ、越前等の大国には大国師を丹波等の小国には小国師を任じていたが、のちに国師に統一された。そして国師は国別一人づつ六年間を以て任期とし、国分寺の運営に携わり、正月八日より一七日の最勝王経の転読および、国庁における吉祥悔過を七僧を請じて行なう行事を主催し、春秋二仲日には一七日金剛般若経を転讀し、安居への指導や、国分寺の僧尼の闕を

筑前國観世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

補い、その修理等にも関与していたのである。また延喜式の主税上に見られるように、全国の国分寺の供料についての問題においても大国の国分寺料は小国の国分寺料より二万束多く、諸国の国分寺の外に中央の諸大寺へ納符する分や、在地寺院の修理料に充当する分も含まれていた。いまの観世音寺に対しても、延喜年間では、筑前国と筑後国の二国が修理観世音寺料として一千束分を負担することになっていた<sup>(45)</sup>。しかし国分寺の運営は国司制度が律令体制のもとで強力に推進されていたときにはかかる全国的な配分が可能であったかも知れないが、藤原氏の台頭は律令制の天皇の上意下達の権威を弱体化することをめざしたものであったし、国分寺の運営は平安時代に到って正しくなされたかどうかは疑わしい。すでに神護曇雲年間には「諸国国分寺塔及金堂、或朽損、由是天平神護二年各仰<sub>レ</sub>所司以<sub>二</sub>造寺料稻<sub>一</sub>、随即令<sub>レ</sub>修、而諸国緩怠未<sub>二</sub>修造<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>唯<sub>一</sub>露<sub>二</sub>穢尊像<sub>一</sub>、実亦輕<sub>二</sub>慢<sub>一</sub>」<sup>(46)</sup>、朝令<sub>二</sub>という状況であつたから、平安時代における国分寺の荒廃への傾向にははげしいものがあつたと考えられる。そしていまや国司を中心とする国衛での権威も、藤原氏の関係者以外は排除され、その交替にも実<sub>レ</sub>があがらず、このことは国師の六年の任期に於ても同様で、中央寺院にありながら地方に進んで行くことを欲せず、平安遷都後は奈良時代の旧制の国師を改変することを欲して、ついに延暦十四年（七九五）八月十三日に諸国講読師に改称されることになった。いまそのことのために便宜全文を掲げることとする。

諸国講読師事

太政官符

應<sub>下</sub>簡<sub>二</sub>任<sub>二</sub>諸國講讀師<sub>一</sub>及<sub>二</sub>相替<sub>一</sub>六年爲<sub>上</sub>限事

右得<sub>二</sub>僧綱牒<sub>一</sub>。案<sub>二</sub>太政官去延暦十四年八月十三日符<sub>一</sub>、<sup>〔藤原綱〕</sup>右大臣宣<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>勅、<sup>〔藤原綱〕</sup>如聞、諸國々師任限<sub>二</sub>六年<sub>一</sub>。兼預<sub>二</sub>他事<sub>一</sub>煩<sub>二</sub>以<sub>二</sub>解由<sub>一</sub>。自今以後、<sup>〔藤原綱〕</sup>宜<sub>下</sub>改<sub>二</sub>國師<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>講師<sub>一</sub>。每<sub>レ</sub>國置<sub>一</sub>一人、<sup>〔藤原綱〕</sup>擧<sub>下</sub>才堪<sub>二</sub>講說<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>衆推讓者、<sup>〔藤原綱〕</sup>申<sub>レ</sub>官奏聞。然後聽<sub>レ</sub>補、一任之後不得<sub>二</sub>輒替<sub>一</sub>。但<sub>レ</sub>讀師者、國分寺僧依<sub>レ</sub>次請<sub>レ</sub>之者、今檢<sub>二</sub>諸國講師、或身期<sub>二</sub>老死<sub>一</sub>、情無<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>足、則自倦<sub>二</sub>講席<sub>一</sub>、何<sub>レ</sub>堪<sub>二</sub>誨導<sub>一</sub>。遂使<sub>二</sub>汚<sub>レ</sub>法墮<sub>一</sub>罪背<sub>二</sub>師資<sub>一</sub>。加以當國司等檢<sub>二</sub>掌伽藍<sub>一</sub>、諸寺綱維趨<sub>二</sub>走府廳<sub>一</sub>。此非<sub>二</sub>道俗異<sub>レ</sub>形、魚鳥殊<sub>レ</sub>性之意<sub>一</sub>。伏望、簡<sub>二</sub>大智<sub>一</sub>而任<sub>二</sub>講師<sub>一</sub>、擧<sub>二</sub>少識<sub>一</sub>而補<sub>二</sub>讀師<sub>一</sub>。限<sub>二</sub>以<sub>二</sub>六年<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>秩滿期<sub>一</sub>。其部内寺寄<sub>二</sub>附件師<sub>一</sub>。然則用<sub>レ</sub>人之策永存、媚<sub>レ</sub>俗之辱自息。謹請<sub>二</sub>處分<sub>一</sub>者。右大臣宣<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>勅、<sup>〔藤原綱〕</sup>所<sub>下</sub>以<sub>二</sub>撰<sub>二</sub>用講師<sub>一</sub>特居<sub>二</sub>永任<sub>一</sub>者、本欲<sub>二</sub>人能弘<sub>レ</sub>道教以利<sub>レ</sub>民也<sub>一</sub>。而今名應<sub>二</sub>簡擢<sub>一</sub>實乖<sub>二</sub>委寄<sub>一</sub>。然則昧進之可<sub>レ</sub>責、豈非<sub>二</sub>採擢之乖<sub>一</sub>方。宜<sub>下</sub>准<sub>レ</sub>所請折中處分。其講師年限一依<sub>二</sub>來請<sub>一</sub>。但淺學之輩未<sub>レ</sub>練<sub>二</sub>戒律<sub>一</sub>、年少之人時聞<sub>二</sub>違犯<sub>一</sub>、<sup>〔藤原綱〕</sup>宜<sub>下</sub>簡<sub>二</sub>年卅五以上心行已定始終不<sub>レ</sub>易者<sub>一</sub>補<sub>レ</sub>之。簡<sub>レ</sub>才用<sub>レ</sub>讓<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>官經<sub>レ</sub>奏等一同<sub>二</sub>前符<sub>一</sub>。若有<sub>下</sub>自事<sub>二</sub>銜賣<sub>一</sub>妄求<sub>二</sub>俗學<sub>一</sub>者。永從<sub>二</sub>擯

出<sub>レ</sub>以懲<sub>レ</sub>後輩。如<sub>レ</sub>僧綱受<sub>レ</sub>囑多揆<sub>レ</sub>情論<sub>レ</sub>之。其讀師者依<sub>レ</sub>舊用<sub>レ</sub>之。又部内諸寺者、講師國司相共檢校、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>獨恣<sub>〃</sub>。(47)

延暦廿四年十二月廿五日

すなわちこの時期においては、中央政府として必要なことは、地方寺院をいかに統制するかということ、巨大な南都寺院の影響力を削減することにあつた。そのために従来の国師を改め、講師と称し、在任期間を六年に限り、満位以上の僧より撰び、大智なる僧を講師とし、読師には国分寺僧の小智なる僧より順次薦に任せて補任することと定められたが、講師の夏期における病没に際して、これを補充することに困難をもなっていた。そして国師をして諸国講師と改変することは、いままでの制度では国司にへつらう国師多く、講席に倦んで、法儀を整えることも出来ず、制度あつても実質的運用に矛盾が多く生じたので、この国師を改めると同時に、延暦廿五年（八〇六）の官符を以て、華嚴・天台・律・三論・法相等の「七宗年分度者、受戒之後、各試<sub>レ</sub>其業<sub>〃</sub>依<sub>レ</sub>次差<sub>〃</sub>任立義複講及諸国講師<sub>〃</sub>」(48)と改められた。このことは七宗の年分度者を以て諸国講師とすると同時に最澄による七大寺に対する天台宗の地方進出をめざす道を開くことでもあつた。そしていまや国分寺も国師でなく諸国講師が、これを檢校することに左の如く変更されたのである。

太政官符

應<sub>レ</sub>令<sub>下</sub>諸國講師<sub>〃</sub>檢<sub>中</sub>按國分二寺<sub>上</sub>事

右檢<sub>〃</sub>案内。太政官去天平十六年十月十七日勅<sub>〃</sub>、國師親臨檢按務令<sub>〃</sub>早成<sub>〃</sub>、用<sub>レ</sub>粮造<sub>〃</sub>物子細勘錄以申<sub>〃</sub>綱所<sub>〃</sub>、一切諸寺亦復如<sub>レ</sub>之者。自<sub>レ</sub>茲以降、遵行既久、至于延暦十四年<sub>〃</sub>改<sub>〃</sub>國師<sub>〃</sub>稱<sub>〃</sub>講師<sub>〃</sub>。重任<sub>〃</sub>講說<sub>〃</sub>不<sub>レ</sub>預<sub>〃</sub>他事<sub>〃</sub>、堂宇頽壞不<sub>レ</sub>存<sub>〃</sub>修葺<sub>〃</sub>。尊像損汗無<sub>レ</sub>情<sub>〃</sub>改飭<sub>〃</sub>。契論<sub>〃</sub>其理<sub>〃</sub>事不<sub>レ</sub>容<sub>〃</sub>然<sub>〃</sub>。今被<sub>〃</sub>大納言正三位藤原朝臣園人宣<sub>〃</sub>、奉<sub>〃</sub>勅<sub>〃</sub>。自今以後<sub>〃</sub>宜<sub>下</sub>与<sub>〃</sub>國司<sub>〃</sub>共令<sub>〃</sub>依<sub>〃</sub>件檢按<sub>〃</sub>。其中<sub>〃</sub>送用度<sub>〃</sub>并勘解由<sub>〃</sub>一依<sub>〃</sub>舊例<sub>〃</sub>。(49)

弘仁三年三月廿日

このような諸国講師が国分二寺を管理することは、単に教学的な問題だけではなく、寺院の修理経営にまで講師が責任を負うこととなり、その責務が大きくなったのであるが、弘仁九年以後、諸国講師を願う天台宗が国分寺等を通じて地方へ教線を伸ばしていこうとする前途を明るくするものであつた。

また国分寺僧の質の低下も、国分寺の経営を危うくする結果をみちびいていた。ことに延喜三年（八〇三）の状況について見てみると、国分筑前國觀世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

寺の差出す読師について、山城国、摂津国等の十一ヶ国では「只補<sub>レ</sub>講師、不<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>讀師、每<sub>レ</sub>修<sub>レ</sub>御願、以<sub>レ</sub>国分僧爲<sub>レ</sub>之讀師、件僧等既無<sub>レ</sub>階業、安有<sub>レ</sub>智行<sub>レ</sub>（中略）加以七大寺外加<sub>レ</sub>来立義<sub>レ</sub>得業者、其数不<sub>レ</sub>少、階業之人、八宗是多、補任之國七道数少、或年及<sub>レ</sub>七十、任<sub>レ</sub>讀師、或算至<sub>レ</sub>八十、被<sub>レ</sub>補<sub>レ</sub>講師、遂襄老之身、亡<sub>レ</sub>於中路<sub>レ</sub>者年之眼暗<sub>レ</sub>於說經<sub>レ</sub>。」<sup>(50)</sup>という結果を生み、国分寺の僧は「闕<sub>レ</sub>修学之勤、乏<sub>レ</sub>戒行之操<sub>レ</sub>」<sup>(51)</sup>という状況であったから、諸国講読師の制を立てても、国分寺より出す読師の任にたえる充分な人材を得ることができなかったし、国分寺自体が崩壊の一手手前であったというべきであろう。また七大寺より選ばれた講師についても、試業に合格するものが多くあっても、任国の定数がきまっているために、補任されるものの年令があまりに伸びて、その任についたときには七十、八十となって、とうてい国内の諸寺の指導や檢察をおこなうことができないような状態となって、このような諸国講読師の制度も空洞化してしまう結果となっていた。その上、遥任国司の場合と同じく、地方寺院への転出を好まず、三会制度が実施されると、地方に出ていった場合、中央の大会に招請されることは不可能となり、僧綱への進出がでなくなってしまうことも、この制度が一時的に存続するにすぎなかった大きな理由であった。

しかし、この制度を最も巧みに利用したのは天台宗であった。それは天台法華宗年分学生式の六条式に、

凡そ兩業の学生<sup>がくしょう</sup>、一十二年、所修所学、業に随ひて任用せん。能く行ひ能く言ふは、常に山中に住して衆の首となし、国の宝となす。能く言ひて行はざるは国の師となし、能く行ひて言はざるは国の用となす。

凡そ国師・国用、官符の旨に依つて、伝法及び国の講師<sup>こうし</sup>に差任<sup>しゃたん</sup>せよ。その国の講師は、一任の内、毎年安居<sup>あんじ</sup>の法服の施料は、即便<sup>すなわ</sup>ち当国の官舎に収納し、国司・郡司、相ひ対して檢校<sup>けんぎょう</sup>し、まさに国裏の池を修し溝<sup>みぞ</sup>を修し、荒れたるを耕し崩れたるを埋め、橋を造り船を造り、樹を殖<sup>う</sup>え蔭<sup>ちよ</sup>を殖<sup>う</sup>え、麻を蒔<sup>ま</sup>き草を蒔<sup>ま</sup>き、井を穿<sup>うが</sup>ち水を引きて、国を利し人を利するに用ひんとす。經を講じ心を修めて、農商を用ひざれ。然るときは則ち、道心の人、天下に相続し、君子の道、永代に断えざらん。

右六条の式は、慈悲門に依つて友情<sup>うじよう</sup>を大に導く。仏法世に久しく、国家永く固くして、仏種断えざらん。悽悽<sup>るる</sup>の至りに任<sup>た</sup>へず、円宗の式を奉り、謹んで 天裁を請ふ。謹んで言す<sup>もつ</sup>。

弘仁九年五月十三日

前<sup>さき</sup>の入唐求法沙門最澄<sup>にっぽうくぼう</sup> <sup>(52)</sup>

と見えて、諸国講師に進んで天台宗僧を任ぜられ、天台宗が南都寺僧の地方進出を好まないという間隙をぬって全国的発展をめざしたのであ

って、最澄が弘仁九年（八一八）に示したという六所宝塔院の思想はそのことをあらわしている。

そのうち一番早く建立が始められたのは、弘仁五年（八一四）の南方の豊前宝塔院で、さきに延暦二十三年（八〇四）の最澄の入唐求法の時に参籠祈念をこめたという縁で、豊前国、香春の神宮寺内に建立され、宇佐神宮との関係を深め奈良時代より創建されている弥勒寺への接近をはかっている。また弘仁五年（八一四）には西方の筑前宝塔院を筑前観世音寺内に造り、ここも最澄が入唐の砌に滞在して五尺の千手観音檀像を安置して渡唐の安全を祈ったという縁によるといわれている。また東方の上野宝塔院は弘仁六年（八一五）に緑野郡鬼石町の浄法寺に、最澄が信濃路より両手地方に入ったとき建てられることになったといい、さらに北方の下野宝塔院は下野薬師寺に近い下都賀郡小野寺の大慈院に建てるに到ったというのである。<sup>(53)</sup>この宝塔院が完全に創建されたかどうかは別として、最澄が天台教団を弘める範囲を示すと同時に、筑前の観世音寺と下野薬師寺の戒垣の存在する処に焦点をあてて自己教団の進出をはかっていることは、やはり諸国講読師の問題と切りはなして考えることはできないのである。そして最澄は「差<sub>二</sub>任立立義複講及諸国講読師<sub>一</sub>者、今天台一門已立<sub>二</sub>円宗大乗三学流傳未<sub>レ</sub>周、望請、別当<sub>レ</sub>簡堪<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>講読師<sub>一</sub>、者各一人、毎年申<sub>レ</sub>官補<sub>レ</sub>之、令<sub>レ</sub>甲寅<sub>二</sub>傳件宗<sub>一</sub>。其一任之内、每年安居法服施料、依<sub>二</sub>先大法師最澄所<sub>レ</sub>奏年分之式<sub>一</sub>、」<sup>(54)</sup>ことに最澄は近江国分寺の出身であったから諸国講読師を通じての教線の伸長をはかったと考えられるのである。

もちろん空海の開いた真言宗もまた、承和四年（八三六）八月に官符を受けて「<sub>二</sub>応<sub>二</sub>眞言宗僧、毎年任<sub>二</sub>諸国講読師<sub>一</sub>事<sub>一</sub>」<sup>(55)</sup>として、全国へ自宗の発展をはかろうとしているのであった。

このような状況を基盤として、観世音寺の動向を見てみると、この寺はさきに最澄との関係について入唐祈願の問題もあったが、空海も帰朝後、入京するまでの間、この寺に止住している。

観世音寺においても、さきの府の国師、筑前国の国師は当然、大宰府講師、筑前国講師と称せられるべきであったが、大宰府は九国二嶋の全体を統括している以上、大宰府講師も当然九国二嶋の講読師を統括する立場にあった。ことに府大寺といわれた観世音寺は、この寺の講師は、反面には府講師としての性格も与えられていたと見るべきである。また安祥寺を創した恵運は、もと東大寺に止住し、のち実慧より密教をうけ、一切経を坂東に広めたのち「天長十年奉勅、被<sub>レ</sub>拜<sub>二</sub>鎮西府観音寺講師兼筑前国講師<sub>一</sub>、以爲<sub>二</sub>九国二嶋之僧統<sub>一</sub>」<sup>(56)</sup>としてこの寺に住した大宰府講師であった。すなわち観世音寺講師は筑前国講師を兼任しているばかりでなく、大宰府講師として九国二嶋の寺院管理をも任されていたのである。

筑前国観世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

そのことは、天長五年（八二八）及び天長七年（八三〇）頃にかけて觀世音寺に止住していた光豊は、「別當觀音寺講師傳燈大法師位光豊」<sup>(57)</sup>と称して觀世音寺別當と講師を兼任した。この光豊はさきの弘仁十二年（八二一）の官符に見られたような六十以上の度者を国分寺僧とされても、老耄の極みで、ものの役に立つべくもなく、「修理堂塔、料濟供養、曾無強堪者」<sup>(58)</sup>ということであるから、国分寺僧二十人の内五人だけでも廿五才を以て任じ、その若がえるべきことを大宰府を通じて申請している。のみならずまた恐らく自分と兄弟弟子と考えられる宇佐八幡宮の神宮寺の弥勒寺講師の光恵とともにさらに上表して、弥勒寺で三年を経過し、六時行道および読経の成果が官司と講師によって認められたとき、この人を年分度者として弥勒寺に与えられ、神宮の神封物により正月や安居等の法服を整え、仕丁を充てられることの許可を得るのほか、光豊は肥前国松浦郡弥勒知識寺にも度者五人を得ることの許可を得ている。<sup>(59)</sup>また大宰府管内の大隅・薩摩国および壹岐島国の講師について「府司於觀音寺、与彼講師共簡試部内僧精進練行智徳有聞、堪任講筵始終無変者將補任之」<sup>(60)</sup>と、觀世音寺は九国二嶋の講師の試定の場ともなったのである。

このことは玄蕃式のなかに、九国二嶋の講師に対して「大宰觀世音寺講師者、預知管内諸国講師所申之政」<sup>(61)</sup>ことがかけられ、この条文はまた延喜式にも組込まれた。<sup>(62)</sup>

また觀世音寺での受戒についても、以前の条文を認め、東海・東山道は下野薬師寺、西海道は觀世音寺でおこなう規定が盛られている。そして受戒者の戒帳は五月以前に集め僧綱に提出するのは六月一日と定められている。そしてこの寺の講師には戒壇が存在している関係上、律分のうちより任命されている。

太政官符治部省

應以律宗僧補任下野國藥師寺講師并太宰府觀音寺講師讀師事

右、嘉祥元年十一月三日格傳、下野國解僞、件寺天武天皇所建立也。坂東十國得度者、咸萃此寺受戒。今尋建立之由。与太宰觀音寺一揆也。而只有別當無講師。令國講師勾當雜事。求諸故實、未親所由。望請、准彼觀音寺、簡擇戒壇十師之中智行具足爲衆所推者。充任件職、便爲授戒之阿闍梨者。右大臣宣。奉勅、講師依請任之。但讀師臨事、次第充用彼寺僧中智行兼備者。別當職早從停止者、而年來之間、件講師、只用階業之人、還忘格條之意、既非其宗、何授戒律。左大臣宣。仰下所司。自今以後、須令戒壇和尚羯



磨教授三色僧<sup>〔中略〕</sup>薦<sup>上</sup>舉大十師中智行兼備之者。綱所加<sup>ニ</sup>覆審<sup>一</sup>。補<sup>ニ</sup>任兩寺講師<sup>一</sup>。但觀音寺讀師寺擇<sup>ニ</sup>小十師<sup>一</sup>同以補<sup>レ</sup>之。者。省<sup>ニ</sup>宜<sup>一</sup>承知依<sup>レ</sup>宣行<sup>上</sup>之。符到奉行。

右大辨藤原朝臣<sup>〔郡底〕</sup>

左大史阿刀宿祢<sup>〔忠行〕(63)</sup>

延長五年十月廿二日

このように觀世音寺においては、戒壇院が存在し、また旧来の諸国講読師の制も、そのまま存続していたが、延喜時代になると、国分寺時代の国師や、そののちの諸国講読師による寺院管理の方向は衰退して、延喜式に定められた、諸寺別当三綱の支配にうつっていった。

凡<sup>ニ</sup>諸大寺并有封寺別當三綱、以<sup>ニ</sup>四年<sup>一</sup>爲<sup>ニ</sup>秩限<sup>一</sup>。遷代之日。卽責<sup>ニ</sup>解由<sup>一</sup>。但廉節可<sup>レ</sup>稱之徒、不<sup>レ</sup>論<sup>ニ</sup>年限<sup>一</sup>。殊錄<sup>ニ</sup>功績<sup>一</sup>、申<sup>レ</sup>官褒賞。自餘諸寺依<sup>ニ</sup>官符<sup>一</sup>任<sup>ニ</sup>別當及尼寺鎮<sup>一</sup>。並同<sup>ニ</sup>此例<sup>一</sup>。其未<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>解由<sup>一</sup>輩、永不<sup>ニ</sup>任用<sup>一</sup>。亦不<sup>レ</sup>預<sup>ニ</sup>公請<sup>一</sup>。但僧綱別勅任<sup>ニ</sup>別當<sup>一</sup>者。不<sup>レ</sup>在<sup>ニ</sup>此限<sup>一</sup>。

凡<sup>ニ</sup>諸寺以<sup>ニ</sup>別當爲<sup>ニ</sup>長官<sup>一</sup>。以<sup>ニ</sup>三綱爲<sup>ニ</sup>任用<sup>一</sup>。解由與不勘知并覺舉遺漏。及依<sup>ニ</sup>理不盡<sup>一</sup>返却等之程一同<sup>ニ</sup>京官<sup>一</sup>。其與不之狀、令<sup>ニ</sup>綱所押署<sup>一</sup>。<sup>(64)</sup>

しかしさきことから、觀世音寺では中世に到るも、講読師による寺院支配が継続されたことは、觀世音寺が九国二嶋を指導することをつづける必要があったことと、九州地方が中央と異なり旧体制が崩壊しにくいこと、名称の存続に強い意欲を持ち、九州全体を太宰府を中心に統轄するという現状を中央政庁でも崩しにくかったこと、また九州の人々の団結力と信仰への理解を示していたことにもよるであろう。

## 一、觀世音寺の構造について

つぎに觀世音寺の組織と、寺院としての運営の実態を知るためには、まずその法会のあり方について検討を加えねばならないが、平安時代におけるこの寺の年中行事を知ることができる史料は極めて少ない。そこで、文書等の中に記載されているものからたどって考えてみることにする。

いま觀世音寺は天台宗に属しているが、明治八年までは東大寺に属していたが、具体的にまとめられた年中行事としては江戸期の「觀世音寺年中行事目録」が存在するが、その内容は室町期に近いものと考えられる。また中世におけるこの寺の年中行事を知るものとしては、平安末期

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

の康治二年（一一四三）二月に觀世音寺三綱が作成した「觀世音寺燈油料恒例佛事料等相折勘文」<sup>(65)</sup>が最もよく当時の年中行事のあり方を示している。またこれが作成された直後の六月二十一日に金堂、廻廊が炎上しているが、この点からも重要な史料といえる。この当時においては、金堂には觀音の本師である阿弥陀仏を安置し、講堂は觀音及び諸尊九体を並坐させた様相を示し、その性格からして、ある時期には觀音の六道済度をあらはす六觀音を安置していたのではないだろうかともおもわれるくらいである。

毎年八月一日より翌年の七月三十日までの三百六十日を回期として、仏聖供米八十二石八斗と灯油料四十四石一斗二升を充当している。またこのときの觀世音寺の全体の仏事料としては二百五十六石を示して、大治四年（一一二九）の觀世音寺封惣勘文にある定田三百七十二町七反二百八十歩、所当米二千四十一石七斗三合よりすれば約十分の六が仏聖料等に充当されているのである。<sup>(66)</sup>

しかしこの総額は東大寺の支配を受けてからで、この時には觀世音寺としては東大寺への運上米として千五百十八石二升八合を決定していて、その内の除分としての寺家例用は二百九石一斗三升一合とあれば、さきの二百五十石余は觀世音寺として、通常の費用を僧侶等の供料を除いて示したものであるということができよう。

この觀世音寺の年中行事のなかで、大宰府に対する祈願として、異敵の侵入を調伏するために護国經典といわれている仁王經や最勝王經を誦するための修正会や、仁王不斷經に多くの費用を充てている。そしてまた正月八日より十四日までの間、觀世音寺で吉祥悔過がおこなわれている。

いまこの寺の年中行事を整理してみると次の表の如くなるのである。（次表参照）

さてその中で、この仁王不斷經は貞觀十六年（八七四）金字仁王經一部が下野薬師寺、大宰觀音寺、豊前弥勒寺に配布され攘災増福のため安居のときにも講じ、それを年中行事にすべきことを太政官より命じられたときに起因する。<sup>(67)</sup>

その費用については仏供料年料五石四斗は大宰府の税司納米より受け、常灯油料は筑前国正税三百束を寺家が買備えている。そして仁王長講の僧供料は堂童子を含んで、筑前国上座郡把岐庄の庄田地子米をもって充当され、余分に収入した場合は閏月の費用や、金堂、香花炭松鋪設の費用として備蓄することを許して、大宰府が税司より僧供料日別一升五合を差出すときには、税司所より寺の長講所の請求にしたがって前年の十月より十二月にかけて差出すことになっていた。<sup>(68)</sup>

観世音寺年中行事

筑前国観世音寺の構造とその性格について

(この年中行事は筑前国観世音寺修理米用途帳(長元十年)平安遺文五七三号。年中仏聖燈油并恒例佛事料米相折帳(康治元年)観世音寺文書〔内閣本〕、  
太宰府観世音寺年中行事目録(江戸期カ)観世音寺蔵により作成した。ただし「」は江戸写本による。※は長元十年用途帳。)

1月	1日～7日	上七日 仁王不断経(金堂) 〔元節供 鎮守日吉山王廿一社〕 上七日修善(呉楽アリ)
	13日	踏歌
2月		修二月七ヶ夜
	15日	常楽会(大講堂)
	17日	〔天智天皇御国関会(大講堂)〕 日吉宮二季彼岸
3月	3日	〔桃花會〕節供 〔傳教・弘法兩大師供〕
	8日	以後五ヶ日 毎年最勝会
4月	8日	〔戒壇院・両山覚頭伝法事〕
	15日	安居初(呉楽アリ)
	中申日	鎮守 日吉山王宮御神事
5月	5日	節供〔菖蒲會〕〔三問三答〕(大講堂)
6月	3日	法華談義六十卷(天永元年9月より)百箇日
	15日	〔祇園会 能(文正2年ヨリ)〕
	18日	〔例講(大講堂)〕
7月	7日	〔七夕会(薬師堂)〕節供
	14日	自恣会
	15日	蓮花会 安居酒肴アリ
8月	1日	〔若宮八幡御祭礼〕 〔諸院法華三昧〕 日吉宮二季彼岸
9月	7日	恒例御国関八講
	9日	〔日吉山王宮御祭礼〕 〔観音節供〕
10月	15日	五ヶ日法華会〔(玄昉僧正追善法事)〕 〔八幡宮、若宮冬王子御祭禮〕 大阿弥陀会
11月		〔大師供、天智天皇御祭事〕
	30日	二期神祭(十一月分)
12月	8日	文殊温室粥
	13日	〔大般若〕一七ヶ日
	18日	〔例講〕
	23日	佛名会
	30日	諸堂散供 歳末讀経
毎月	18日	観音講
二季	受戒(春・冬)	
――	※句當観恵法師常供、※恵当成穩法師常供	

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

この僧供料をめぐって三綱と金堂長講所衆の間に庄司任命の支配権をめぐって永祚二年（九九〇）に相論が生じ、三綱が供料の庄園の庄司を任命することは不当であるとの内紛が生じている。その僧供料は作人別反別二斗五升で地子米三斗二升五合をいうのであって、この地は現在の朝倉郡杷木町にあたる。

一請以三重長講僧等、永可三進三退官燈分稻并把岐庄事

右、官燈分稻、庄家等度度蒙三府牒、御外題等之後、僧等進退、隨卽夜々挑三燈明、日々長講事無三闕怠、而時三綱等申云、御任之後、必件庄并官燈稻等、如レ本可レ爲三寺家進退、既本願天皇御施也。何長講僧等、任意恣可三進退三乎云云。蒙三府裁、進退爲三永代之例。以前条事、如レ右、抑佛法興隆之跡、依レ人既顯、王法嚴政之道、當時進退也。<sup>(69)</sup>

すなわちこの長講僧等は、いわば他寺の学侶に相当するものとも考えられるのである。

このことは、年中行事に見られる四月十五日より七月十五日の安居の初めと終りに呉樂を奏す例となっていることに対しても、筑前国の正税物より充当されることになっていた。

府政所下 筑前國

應依レ例充三下觀世音寺安居御願吳樂析物事

右、得彼寺牒狀稱。件吳樂安居御願初・後、筑前國下三行其析物、所レ令三勤仕也。而自去長保三年<sup>(干脱)</sup>今不<sup>(干脱)</sup>下三其析、因茲樂人等叶三例期、不<sup>(干脱)</sup>參仕、度々雖<sup>(更)</sup>牒三送其由、<sup>(更)</sup>不<sup>(干脱)</sup>承引、御願舊蹤、可レ謂三廢忘、仍進<sup>(更)</sup>牒如件。望請府裁。下給三府符、令三下行三析物依三勤仕一者。中納言兼帥平卿宣、件樂、是鎮護例事。不<sup>(干脱)</sup>可<sup>(干脱)</sup>闕怠。而依不<sup>(干脱)</sup>行三析物、不<sup>(干脱)</sup>勤三其事、國宰所爲不<sup>(干脱)</sup>可<sup>(干脱)</sup>然。宜加三下知。充三行樂人析物、令<sup>(干脱)</sup>勤三仕件事者。所仰如件。國宜知<sup>(干脱)</sup>狀。依<sup>(干脱)</sup>宣行<sup>(干脱)</sup>之。

大監平朝臣

大監

長保五年七月十三日

(70)

またつぎに年中行事に見えている三月八日の毎年最勝会に対して、中央でおこなっている興福寺維摩会・宮中大極殿での御齋会、三月の薬師

寺における最勝会などの三会制度にのっとり、九州の大宰府においても実施することを決定している。そのために観世音寺に大宰府の警固所田二十町をこれに充当し、十町分は僧供料、十町分は請僧布施料に、主厨司領田二十町を以て遍知院料に、蔵司税司並びに諸司納物を府院御齋会料として定められている。そして「撰管内有智淨行輩、爲件三會請僧、以講師一口聽衆貳拾口爲恒例定數也。其講師則經三會訖。号爲已講。春諸國正税日別充米壹斗、件人生前之間長爲其供養料也。前人昇進、擧用次人。已講衆共以僉議、抽聽衆中之堪能、請補當年之講師。以聽衆年勞之者、補任壹伎嶋之講師。然即以彼嶋、爲此三會之分、不任他人、常補件人、待其闕年次第行之。」とあって、観世音寺の最勝講には二十口の聽衆を置き、その講師となったもの、あるいは多年の聽衆を勉めたものをもって壱岐島講師とするという制度を確立するにいたって、観世音寺が府大寺としての地位をより拡大していったのである。

しかしてこの寺での大会は九月七日の恒例御國関八講でこれには五十六石の多額の費用を用い、八口の講師を請じて、四日間談義をおこなう、その僧供料は延二百四十八前に達し、庄園である山北封、大石封、碓井封、全生封の四ヶ所が充てられ、連日六十二人の僧が招かれ、観世音寺としては最大の行事であった。それは大宰府を開き発展させたのは天智天皇以来であるということを示めすと同時にこの寺の開山忌にもあたる行事であったのである。そして正月の修正会の終りの日、夏安居の初めあるいは終りに呉樂が奏されて、昔、新羅の使者をもてなした例にのっとりしている。

つぎに十二月二十三日の仏名会に関しては、承和年中より三千仏の画像を画いて七道諸國及び大宰観音寺等に仏名経を添えて貞観十三年（八七一）に配布されてより、この寺で実施されるようになったのである。<sup>(72)</sup>

そしてまたこの寺の諸事の運営にあたっては、延喜式でも述べているように、筑前国正税物が充当されていたことは先に示した如くであるが、のちにはさきの四封がその主要なる財源となっていたのである。

つぎに、このような年中行事を中心に運営されていた観世音寺の組織を考えてみることにする。一般には諸寺院の統括の組織については、延喜式で規定されているごとく別当がその中心となっているのが通例である。しかるに、この観世音寺は府大寺という特殊な事情によって、府講読師にあたるものが、別当の上位にあって、この講読師は、諸会を主催すると共に、春秋二季の戒壇における授戒を通じ、たんに観世音寺のみならず、九国二嶋の授者に対する授戒を通じ、その指導性を最初より与えられていたから、その慣例にもとづいて別当、三綱の上に位置して文

筑前国観世音寺の構造とその性格について

# 筑前國観世音寺の構造とその性格について

書に署判する義務を帯びていた。また重要な延喜五年十月一日に提出された資財帳でも講師即別当は筆頭に署判し、この場合においては講師真文、読師観盛のあとに帥および大貳・少貳が認証を与えているのである。

そしてこの講師師制がこの寺では特に重要な位置を占めていることを示している。このような講師師の遺制が存続するに到った理由については先に詳述した。また後には講師と別当を一人で兼ねることもおこって来た。この講師別当のほかに寺務組織として寺家三綱(上座・寺主・都維那)が見られるが、これは奈良時代より見られ、天平宝字二年(七五八)の奴婢関する解では、上座・寺主・国師使僧が署判を加えている。<sup>(73)</sup> また天平宝字五年(七六一)には西海諸国のために戒壇がこの寺に設置され、国師にその重責が荷せられたのであるが、延暦十四年(八九五)以降、国師が講師師に改められたのち、天長五年(八二八)には光豊が観世音寺講師に任ぜられたとき寺家三綱を批判して、「三綱之職事多<sub>ニ</sub>米塩<sub>一</sub>、修理堂塔<sub>ニ</sub>新<sub>ニ</sub>濟供養<sub>一</sub>曾無<sub>ニ</sub>強堪者<sub>一</sub>」<sup>(74)</sup>と、その立場の相異を述べている。そして講師は年分度者を指導し、はたまた「須<sub>ニ</sub>簡<sub>ニ</sub>智行者<sub>一</sub>、羯磨剃頭<sub>ニ</sub>請使授戒<sub>一</sub>」<sup>(75)</sup>と授戒を主催するとともに、また「正月并安居等法服布施」や「法會之庭法用有<sub>ニ</sub>闕<sub>一</sub> 轉經之日經文訛雜」を検するなどの役を帯びていた。<sup>(76)</sup> もちろん先にも述べたように大宰府講師は筑前国講師を兼ね、講師師は修正月安居を完全に行なうことは重要な任務であった。またこの講師師は府内の精進練行の僧を選んで、観世音寺で試業して、講筵に堪えるものをもって九国二嶋の講師師とする権限を与えられていた。<sup>(77)</sup> そのため斉衡二年(八五五)に、この寺に大宰府より布薩戒本田二町を加えられている。<sup>(78)</sup>

天慶三年(九四〇)の高田庄の相論の時の観世音寺牒状の署判には講師師の外に四人の別当が見えている。<sup>(78)</sup> そのほかに俗別当のような性格で大宰少貳が検校職を、俗別当を大宰府の大監、大典等の職にあるものが兼ねている。

つぎに永長二年(一〇九七)の呉楽田公験案において、観世音寺所司大衆が署判を加えているが、<sup>(79)</sup> このときの人数は四十八名にもおよんでいる。

読師(1)―上座(1)―権上座(4)―寺主(1)―寺主(5)―都維那(1)―権都維那(3)〔講師兼別当〕―学堂(5)―大衆(17)―堂達(1)

となっている。そのほかにこの寺に関するもので多くの署判の見えているのは天永元年(一一一〇)観世音寺談義縁起に対する二十九人の自署のあるもので、<sup>(80)</sup> このときの区分は次の如くである。

所司  
講師(兼)別当(1)―読師(1)―檢校(1)―上座(1)―権上座(1)―寺主(1)―権寺主(1)―都維那(1)―権都維那(1)―傳授大師(2)―学頭(1)―講代(1)―勸進(3)―談義衆(13)

この二つの文書は、その性格を異にしているけれども、最初のものは寛弘六年（一〇〇九）寺僧増昭が安居御願の初・後の呉楽徭丁三十二人分の功稲八百四十束分を太宰府蕃客所領とすることに對する抗議のために作成されたものであって、したがって安居にたづさわる学衆としては、この文書に署判を加えることが当然であったと理解されるから、ここではおおかた寺内組織が判明するともいえる。すなわち觀世音寺の全体の統括は講師兼別当によってなされているのであって、寺務機関は所司と称され三綱職がこれに掌っている。寺内大衆は学堂と大衆に分かれ、安居談義や、最勝講の講師、あるいは聴衆となる人々を学堂と称し、東大寺や興福寺に見られる学侶と同じ性格のものといえる。すなわち学侶とは『南都僧俗職服記』では「学問之為交衆スル僧ナリ」と述べてあり、堂衆が「両堂衆 是論不出、平日法用肝要ニ勤レ之」と学侶とは區別している。学侶は学問に専ら従事し、論義に参加するのに對して、堂衆は論義に参加することができず、平日の法用にのみ参加し、供花、読経、読師等の役にたずさわるものと規定されている。即ち学問（主として佛教に關する）をもって佛に仕える僧侶の集団を指して学侶と呼称したのである。学侶に對する呼称は時代や、寺院により種々異なるが、上代では「学問僧」「学生」「学僧」と呼ばれていた。特に学侶と称されたのは主として平安時代になって、堂衆との階層分離を示す上に盛んに用いられるようになったのである。<sup>(81)</sup>それに対して大衆は堂衆に批べられるもので、諸堂の管理から、法要の諸準備、供料の調達等に掌わっていたと見るべきであろう。

觀世音寺の寺院經濟については天平十八年（七四六）に造營を見て以来、大同四年（八〇九）、弘仁十三年（八二二）、承和九年（八四二）、貞觀三年（八六一）、仁和二年（八八六）と多年にわたって、觀世音寺交替実録帳を作成しているが、延喜五年（九〇五）に作成された觀世音寺資財帳が最も重要である。その原本については現在は東京芸大に所蔵され、前欠本となっているが、最初は觀世音寺に存在し、保安元年（一二〇〇）に觀世音寺が東大寺の末寺と化すると共に、仁平三年（一一五三）の東大寺印藏目錄の中に含まれて東大寺に移されたものが、明治の東大寺の没落と共に流出したものが東京芸大に入手されたもので、その原本の異動については高倉洋彰氏が觀世音寺に藏されている写本、江崎正澄氏の写本等を校合して示されている。<sup>(82)</sup>

つぎに觀世音寺において造像された諸仏についても、まず造仏が盛んとなったのは、天延三年（九七五）頃と見られるのであって、その時は大宰大貳藤原国章が寺に薬師、十一面、延命の三体を新造し、寛和二年（九八六）同じく大貳菅原輔正が丈六觀音像を造立するなど寺院内の諸仏がつぎつぎに造像され寺勢は盛んとなっていた。また寛弘八年（一〇一一）には資財を勘録するための唐櫃の整理がなされているが、康平

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

七年（一〇六四）には塔が炎上している。

（康治二年七月十九日）

今日。左大臣召<sup>〔有〕</sup>外記<sup>〔有〕</sup>下<sup>〔有〕</sup>給太宰府解。可<sup>レ</sup>勘<sup>レ</sup>例者。其狀云。去六月廿一日夜、觀世音寺堂塔廻廊燒亡。觀世音寺、是都府之大廈。天智天皇以後、元明天皇以往五代之聖主相續草創之御願也。五百餘年之間、奉<sup>レ</sup>祈<sup>レ</sup>國家<sup>〔有〕</sup>不退靈驗之砌也。但於<sup>レ</sup>塔者、康平七年五月十一日燒亡了。中尊丈六金銅阿弥施如來像在<sup>レ</sup>猛火之中、尊容無<sup>レ</sup>變。昔自<sup>レ</sup>百濟國<sup>〔有〕</sup>奉<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>之云々。<sup>〔83〕</sup>

この時には、觀世音寺の大講堂に安置されていた不空羅索觀世音を始め、塔内の中尊、阿弥陀如来および諸尊、廻廊等五百余年にわたって災火を逃れていた伽藍が炎上したのであつて、治暦二年（一〇六六）には大宰府は「造觀世音寺行事所」を設けてこの寺の復興に着手し、府内の人々を動員してその再建につとめた。<sup>〔84〕</sup>

就中造作之間、始自<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>杣夫工行事官人管内刺史及國土人民、加<sup>レ</sup>力盡<sup>〔有〕</sup>。一府群官兩郭男女、安隱泰平。加<sup>レ</sup>之施<sup>〔有〕</sup>一粒一草、身自下<sup>レ</sup>手道<sup>〔有〕</sup>工人、材木打土鴛鴦蟬蝶之輩、或又路頭往反但頭、舉<sup>レ</sup>手歸依、隨喜之人、當寺諸寺禪侶、封家庄園民烟、善願圓滿、凡厥普天率土、横目群生流類、十方施主一切衆生、現當二世之望、各無<sup>レ</sup>疑決定往生之願必令<sup>レ</sup>遂。乃至無邊平等利益。<sup>〔85〕</sup>

かくてその結果、法華經を始め、仏具類も整えられて、二年後の治暦二年（一〇六六）十一月廿八日に瓦葺五間四面の大講堂が再建され、金色丈六觀世音像が完成して落慶を見ることになった。<sup>〔86〕</sup>

しかしこの時の寺の修復のうち、主なる寺領庄園について、延久の莊園整理令にもとづいて寛徳二年（一〇四五）以後の莊園を取り調べられ、当寺も碓井封（百五十一町四反二百三步）、肥前國中津庄等もその対象となつて整理されようとしたがこれを逃れた。<sup>〔87〕</sup>

それと共に觀世音寺は肥岐莊をはじめ、承暦二年（一〇七八）以後の寺院莊園の再確認をおこない、延久の莊園整理にかこつけて侵入しようとした国衙検田使等の入勘を停止して免判をとりつけることにつとめた。その間にあつて寛治三年（一〇八九）には把岐庄内で松永法師なるものが、宇野御厨の下文をかく押妨をはたらくなど寺領内の相論も多く発生し、<sup>〔88〕</sup>上座郡黒嶋庄でも勘返田一町につき作人の大宰府湯打板役の免除を求めたのであつた。これらのことから觀世音寺としては、延喜五年以来の資財帳の整備が緊急に必要となつたとともに、寺宝管理の対策を樹立するためにも嘉保年間（一〇九四）に新たに「嘉保元年宝藏実録日記」を作成することになった。それには寛治六年（一〇九二）の実録



日記を基本とし、見在するものと無実なるものに分け、十六個の韓櫃の内容を調べ、別納の箱や、天慶の乱で純友に掠取られた武具等も記載している。<sup>(89)</sup>

その上、観世音寺として重要な四封のうちの碓井封に対する安楽寺神人の乱入が永長二年（一〇九六）におこなわれるなど寺領についても不安の種が尽きなかった。

観世音寺はさきに講堂の再建ができたものの、五重塔の再建はおぼつかなかったが、幸い大宰権師に信仰の厚い大江匡房が来府すると、その計画が具体的に進み、その造塔のための九州諸国への造営料の分配が示された。五重塔の造塔料図として一層（筑前・大隅）二層（肥後・豊後）三層（筑後・日向）四層（肥前・薩摩）五層（寺家）と承徳三年（一〇九九）の庁宣によって定められたが、その計画が具体的になる直前の康和四年（一一〇二）八月の大風により金堂、戒壇院、廻廊、大門等が再び顛倒してしまった。<sup>(90)</sup>

ここで考えなければならないことは大江匡房の大宰府への下向である。大江氏は代々菅原氏と共に文筆に長じていた家系で、文章生、文章得業生、文章博士になった人が多い。匡房は父は参議大江成衡、母は官内大輔橘孝親朝臣の娘で、天喜四年（一〇五六）文書得業生となり詩文に長じ、若くして三事兼帯し（藏人・左衛門権佐・右少弁）、後三条天皇の師となった。また政治的には、同天皇の荘園整理令のための記録所の補佐を行っていたが、天皇の崩御ののち記録所の政務もおとろへたので、匡房も一端出家を志したが藤原経任に止められ、白河天皇の即位後は天皇に重んぜられ、美作守に任命されて従四位下に昇進した。応徳元年（一〇八四）左大弁に進み、匡房が大宰府に関与したのは、永長二年（一〇九七）三月、勅授によって大宰権師を兼ね、次の年の九月に下向して、第一次は承徳元年（一〇九七）―康和四年（一一〇二）解任までの五十七歳より六十二歳まで、第二次はつぎに大宰権師となった藤原季仲が、日吉社の訴えにより周防国に配流され、さらに常陸国に送られたためふたたび再任され、長治三年（一一〇六）―天永元年（一一一〇）まで、すなわち六十六歳から七十歳まで在任した。そして、彼はその一年後に七十一歳で薨じている。<sup>(92)</sup>

しかし平安末期となると任官されても実際に赴任するものは少なく在京して下向せず、遥任化することは常であった。匡房も承徳二年のときは下向しているも、長治三年の二度目のときは下向していない。この間大貳は藤原長房が任ぜられていたが寛治八年（一〇九四）の彦山闘乱により、それ以後十六年間は闕官となり、天永二年（一一一一）には藤原顕季が大貳となっている。このような大宰府における遥任化の傾向は、

筑前國観世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

「帥卿任官符旨、雖被支配、於其身在京、不赴任御之間、雖有下知之名、敢無來役之責、自今以後、又以同前款<sup>(93)</sup>」との状況で、觀世音寺に對しておこなつたさきの大江山房による五重塔再建計画も、まったく水泡に帰してしまつたのである。いまこの全容を示す必要からも全文をここにかかげる。

觀世音寺三綱等解 申請 府裁事

請被言上 公家、管國受領中充給重任并遷任宣旨申於申請輩、令造立當伽藍内燒失五重塔壹基狀、

右、三綱等、謹檢案内、當伽藍者、是天智天皇之草創也。其後天武・持統・文武・元明四代之聖主、殊下綸綍、所被令造畢也。既雖先帝之建立、永爲累代之御願、有驗之靈地、殊勝之伽藍也。而去康平七年五月十一日不慮外天火出來、五間講堂・五重塔婆、拂地燒亡。

于時宗像大卿御任也。仍殊企結構、造立講堂并佛像、所被奉供養也。但至于塔廟者、當<sup>(時)</sup>無其營、余降灰律遙換、居諸久積、爰江都督卿前任之日、可造立件塔之由、申下官符、雖被下知管内諸國、世及澆季、民皆凋弊、不寄一之木、不運一之土。因茲帥

卿重經奏聞、再申下宣旨、被加催促於諸國之間、任秩已暮、歸洛既畢。其後亦拜除都督之時、爲遂彼素懷、又經奏達之日、去嘉承<sup>(元)</sup>年五月廿五日官符備。應令管内諸國并本寺致中丙造營上乙兼又不論神社佛寺權門勢家庄園、平均支配材木、終不日功觀世音寺五重

塔一基事。右正二行(帥)權大江朝臣去三月廿三日奏狀備。重檢案内、件塔婆者先帝之御願、鎮西之大廈也。去康平年中寺家有火、拂地燒亡。自余以來、雖經年序、無復舊基。爰匡房前任之日、任官符旨、或支配管内諸國、或充課本寺、欲營土木之處。任秩既暮、歸京忽催、

是素懷不遂之條、丹心爲歡之間。重浴朝恩、再任都督。今度不抽勤節者、何日又勤營造乎。望請天裁、任前任所給官符、重被下宣旨。且令管内諸國本寺勤營造、且不論神社佛寺權門勢家庄園、支配材木、將終不日之功者。正二位行大納言兼民部卿太皇太后宮大夫

陸奥出羽按察使源朝臣俊明宣、奉勅、依請者。帥卿任官符旨、雖被支配<sup>(マ)</sup>矣。其身在京、不赴任御之間。雖有下知之名、敢無來役之實。自今以後、又以同前敷者。只以申請功課之宰吏、可被令造營也。若然者、便勵成風之力、定畢不日之功者歟。抑塔廟燒亡

之刻、其中佛菩薩像皆所奉取出也。件尊像等併所奉宿置<sup>(二)</sup>蓋金堂内也。然則三時之行法、三昧之所作、於金堂所勤行也。而間

康和之比、大風之刻、金堂又顛倒、尊像多損。因茲行法之法侶、皆失其所。有限御願、殆及闕忘。雨朝雪夜、張蓋致其勤。香花燈明、夙暮難備。非番寺家之凌遲、多亦宰府之澆薄也。若此時不與施者、亦期何時。天長地久之御祈、何事如之。鎮護國家之謀、何善過斯。

望請 府裁、速被言上公家。遷任重任之中、有申請諸国司者。即被下裁許之宣旨、欲遂塔婆之造營。仍注事狀、以解、

元永二年三月廿七日

權都那從儀師淨与  
在判

都維那從儀師  
(傳參)

權寺主大法師

寺主威儀師

權上座大法師

(94)

ここに示されている如く、大宰帥の遙任は大江匡房以後大宰帥に任ぜられても任に赴かず、大貳たるものも京に居りながら執務するという状況で、府民の事情にうとく、大宰管内の安樂寺や宮崎宮、大山寺、香雉宮の神人の押妨絶えないという状況であった。その原因はさきに述べた如くである。そして「其故者去々年 春任大宰帥、于今不赴任、(中略)凡下人之訴、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>仗議事等<sub>一</sub>也。為<sub>二</sub>帥大貳之人<sub>一</sub>乍<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>京。最初条事許、所<sub>二</sub>申請<sub>一</sub>也。其後早着<sub>二</sub>任所<sub>一</sub>、行<sub>二</sub>府務<sub>一</sub>也。其身乍<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>京、暗執<sub>二</sub>行府務<sub>一</sub>。至<sub>二</sub>民憂<sub>一</sub>者、申<sub>二</sub>行陣定<sub>一</sub>之条、非<sub>二</sub>賢者之所<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>。」とゆう状況であったため「大宰府言上、神民蜂起、群盜相乱、凡管内放火殺害者、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>勝計<sub>一</sub>……是帥匡房卿三ヶ年不<sub>二</sub>下向<sub>一</sub>問、府内相乱或或放火、殺害、如<sub>レ</sub>此濫惡不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>勝計<sub>一</sub>」<sup>(96)</sup> 大宰府の九国支配の律令体制は崩壊の手前であるという状況であった。そして保延六年(一一四〇)の大宰府長官と管内諸社神人、国司また府官との対立は、ますます激化混迷をつづけ、府内の權威は大監紀朝臣、惟宗朝臣、監代大中臣、宗形朝臣等の大監職に政治の實權が移っていった。ためにより以上權帥、大貳は在地に下向せず遙任化が決定的となつていった。そして「天永二年辛卯、大宰帥中納言大江匡房卒、蓋中頃以來、帥人不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>府、大貳以下居<sub>レ</sub>府管鎮西、至<sub>二</sub>後世<sub>一</sub> 大貳亦不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>府、少貳為<sub>二</sub>府主<sub>一</sub>、帥、大貳在<sub>レ</sub>朝司其職云々、亦於筑前置<sub>二</sub>留守所<sub>一</sub>、官吏到<sub>レ</sub>之、後武家号<sub>二</sub>宰府<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>守護所<sub>一</sub>矣」<sup>(97)</sup> この状況は觀世音寺に於ては府大寺であった關係上、その影響を受けないわけにはいかなかった。

ことに康和四年(一一〇二)の大風による伽藍の被害は、四年後の嘉承元年(一一〇六)五月廿五日に、管内諸国の神社、仏寺、權門勢家に平均して觀世音寺五重塔及び十二間僧房の再建の官符を大宰府に朝廷より下されることを命ぜられても、管内諸国国司の交替はげしく、宰官また遙任化して「可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>管内諸国<sub>一</sub>造立<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>下知<sub>一</sub>、是依<sub>二</sub>西府之大廈<sub>一</sub>、諸国未<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>其勤<sub>一</sub>」<sup>(98)</sup> その目的を果すことができなかったのである。

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

觀世音寺の支配についても、「近代為講師別當<sup>(99)</sup>之者、偏貪<sup>(99)</sup>庄園地利、不<sup>(99)</sup>營<sup>(99)</sup>寺家之土木、或運<sup>(99)</sup>上京都、偏充<sup>(99)</sup>私用、或給<sup>(99)</sup>從類之資願、無<sup>(99)</sup>堂舎之修造、如<sup>(99)</sup>此之間、寺塔門廊悉以頽壞、佛聖燈油殆及闕怠」<sup>(99)</sup>と、觀世音寺自体も講師兼別當が寺塔修理に尽す覚悟が見られない状況であった。もちろん修理の条件としては「諸堂之破損、抑少破之時者、寺家加修補、及<sup>(100)</sup>大破之時者、公家御勤也<sup>(100)</sup>」<sup>(100)</sup>といつても、大宰府自体が觀世音寺修理への管内統制の力を失い、寺院そのものの自活性も弱い現状では、このような大風の被害より立あがることは不可能であった。

三、觀世音寺への石清水別當の進出について

平安初期より中期にかけての觀世音寺別當の動向は、この寺の別當次第が明らかでないので、その性格を正しく知ることができないが、別當の任限は六年であつたが、ここに觀世音寺の復興をめぐつて新たな動きが見られるのである。それは嘉承元年（一一〇六）十月に僧暹宴という人物が別當に任ぜられている。

この暹宴なる人物は、中右記に、

裏書云  
件暹宴者、是鎮西觀世音寺別當也。依<sup>(101)</sup>修<sup>(101)</sup>理彼寺<sup>(101)</sup>功、今日叙<sup>(101)</sup>法橋<sup>(101)</sup>也。世稱<sup>(101)</sup>腰引禪師、以<sup>(101)</sup>交易物<sup>(101)</sup>爲<sup>(101)</sup>其業。仍富重<sup>(101)</sup>千金重。外國之者、昇<sup>(101)</sup>綱位<sup>(101)</sup>如何、有<sup>(101)</sup>其故<sup>(101)</sup>歟。<sup>(102)</sup>（已上裏書）

と見えて、宋貿易やその他の交易によって巨万の富を貯えた人物であつた。このようなことからして、彼はこの寺の修理をはかろうと考えるのであるが、この文書のなかに去る康和四年（一一〇二）の大風で倒壊したときの別當は石清水別當の頼清と見えている。この頼清というのは石清水検校元命の女を母として生まれ、石清水八幡宮護国寺別當となつて康和三年正月に六十三歳で没している人物である。この頼清は觀世音寺別當のみならず、大山寺別當も兼ねており、没すると共にその子光清に別當職をゆづっている。すなわち「爰<sup>(103)</sup>雖有<sup>(103)</sup>別當法印非常<sup>(103)</sup>一依<sup>(103)</sup>院宣<sup>(103)</sup>、故法印弟子石清水修理別當光清拜<sup>(103)</sup>任當寺長吏<sup>(103)</sup>已了<sup>(103)</sup>」と見えている。

この光清はそのほか弥勒寺検校、弥勒寺喜多院々主、同宝塔院々主、極樂寺別當等を兼ねていたが、その光清より暹宴は觀世音寺別當職を受けた。その理由としては嘉承元年（一一〇六）十月八日に暹宴が独力を以て顛倒した觀世音寺の金堂、廻廊、中門の修理を府に申請し、再建の

工事に着手した。そして彼の計画では、大門一字、戒壇一字、四面築垣、仏像二軀、力士二体、でこの新造のほか金堂の二層、諸仏尊像等は用材を調達したままになっているので、これを整えて修理完成したいということであった。遷宴は天仁二年（一一〇九）には講師兼別当に任ぜられ、その弟子良宴を読師としている。この遷宴による修理の内容は天仁三年（一一一〇）の戒壇院の修理と、廻廊、四面築垣の再建のみであった。<sup>(104)</sup>

しかしこの寺の修理は遷宴に於ても全体から考えて一時的なものにすぎず、保安元年（一一二〇）六月に寛助の決断により観世音寺はついに東大寺の末寺と化した。

<sup>七十五</sup>  
僧正寛助 保安二年。任大僧正  
東寺長者兼法務。

元永元年。四月廿八日。符。<sup>六十二。</sup>眞言宗仁和寺。左中弁師。賢息。二品親王并經範法務資。同六月十四日。始行寺務。補庄園司。（中略）保安元年月日。観世音寺被<sub>レ</sub>付<sub>ニ</sub>

本寺。近年八幡別當頼清光清等相次補任。雖<sub>レ</sub>似<sub>ニ</sub>隨<sub>ニ</sub>本寺。已有<sub>レ</sub>名無<sub>レ</sub>實。僧正枉申<sub>ニ</sub>請仙院。偏付<sub>ニ</sub>寺家。向後美談也。<sup>(105)</sup>

このことについてはさらに稿を改める。そして東大寺が末寺化したのも二十四年を経た康治二年（一一四三）に再びこの寺が炎上して、金堂、西南廻廊が焼失した。そのうち久安四年（一一四八）の調査による観世音寺の堂塔の現状は

講堂 一字五間四面（不留雨露）

五重塔 一基（焼失無実）

金堂 一字 焼失

東西廻廊 西南焼失

中門 顛倒

二王堂 大破

戒壇院 五間 壁、扉大破

門 大破 沙弥戒料 廊三間 顛倒無実

四面築垣 西南大破

筑前國観世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

鐘堂 三間 朽損

経藏 三間 朽損

温屋 五間 朽損

食堂 六間四面 天井皆無実

東西、南大門并大垣 破損

東大門破損、西大門顛倒、南大門

大鳥居橋朽損

日吉社 上宮殿、下宮御殿 朽損<sup>(106)</sup>

という状況で、このような破損を修復できなかったことも、この寺が東大寺の末寺となっていた要因であったともいえる。

つぎに觀世音寺別当に石清水別当が補任されたことについて考えてみたい。この寺に關係するのは頼清と光清であるが、頼清はその姉が鳥羽天皇の皇后宮の女房であったことや、その背景をもつその子の光清が、堀河・鳥羽・崇徳の三朝に仕えて三十五年間も石清水の社務を統轄し、そのために光清は石清水の強力な指導者となった。またその娘を鳥羽院に入れて、道恵法親王(寺)覚快法親王(山)を生み、外戚の關係をたもち、天台勢力にも近づいて、主として園城寺方に近かった。

そして光清はかねてより石清水勢力の西国への浸透をはかりたく考え、東大寺で受戒を受けた機をとらえて康和二年(一一〇〇)にその推挙を得て康和四年以後の觀世音寺登壇戒師に任ぜられると共に同寺の別当にも合せて補任されることになったのである。

申<sub>下</sub>東大寺申<sub>ニ</sub>大宰符觀世音寺登壇戒師<sub>ニ</sub>舉狀<sub>上</sub>井本寺解狀

東大寺戒壇院律宗三職大法師等誠惶誠恐謹言

請<sub>レ</sub>被<sub>下</sub>特任<sub>ニ</sub>先例<sub>ニ</sub>補<sub>上</sub>任<sub>ニ</sub>齋(同イ)圓大法師代觀世音寺登壇戒師<sub>上</sub>狀、

舉進傳燈大法師位光清<sub>年</sub> 〇〇〇〇

右、大法師等、謹檢<sub>ニ</sub>案内<sub>ニ</sub>雖<sub>下</sub>須齋圓任<sub>ニ</sub>夏藤次弟<sub>ニ</sub>下<sub>コ</sub>向彼寺<sub>ニ</sub>勤<sub>上</sub>仕御願<sub>上</sub>而道路遼遠、山海險阻年老病重、不堪<sub>ニ</sub>行步<sub>ニ</sub>因<sub>レ</sub>茲簡<sub>下</sub>定堪<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>其

筑前國觀世音寺の構造とその性格について



器。大法師光清、彼寺戒師所<sub>ニ</sub>舉達<sub>ニ</sub>也、望請、本寺早奏<sub>ニ</sub>聞公家<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>賜<sub>ニ</sub>官符<sub>ニ</sub>仍勒<sub>ニ</sub>事狀<sub>ニ</sub>以解、

康和二年九月十七日

教授 傳燈大法師位圓秀

羯磨 傳燈大法師位宗快

和上 傳燈大法師位請圓

東大寺解 申請 天恩事

請<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>殊蒙<sub>ニ</sub> 天恩、任<sub>ニ</sub>前例<sub>ニ</sub>、賜<sub>ニ</sub>官符<sub>ニ</sub>太宰府<sub>ニ</sub>、補<sub>中</sub>任末<sub>ニ</sub>寺觀世音寺、明後年以後登壇戒師代<sub>ニ</sub>狀、

副進律宗三職<sub>ニ</sub>舉狀一通、

右謹檢<sub>ニ</sub>案内<sub>ニ</sub>、本願聖主、建<sub>ニ</sub>立戒壇院<sub>ニ</sub>之後、諸國度者沙彌、於<sub>ニ</sub>此院<sub>ニ</sub>、登壇受戒、實紹<sub>ニ</sub>如來之遺跡<sub>ニ</sub>、這傳<sub>ニ</sub>佛法之戒光<sub>ニ</sub>。爰東西堺遠、參謁有<sub>レ</sub>煩。因<sub>レ</sub>茲東者於<sub>ニ</sub>下毛野藥師寺<sub>ニ</sub>、而令<sub>ニ</sub>登壇<sub>ニ</sub>、西者於<sub>ニ</sub>太宰府觀世音寺<sub>ニ</sub>、而令<sub>ニ</sub>得度<sub>ニ</sub>。此等兩寺皆依<sub>ニ</sub>本寺本師夏謁次第<sub>ニ</sub>、且補<sub>ニ</sub>任戒師<sub>ニ</sub>、且寺務執行、而齋園雖<sub>レ</sub>當<sub>ニ</sub>巡行<sub>ニ</sub>、依<sub>レ</sub>病學<sub>ニ</sub>代、而件大法師光清者、融<sub>ニ</sub>五篇七聚之軌則<sub>ニ</sub>、尤爲<sub>ニ</sub>登壇戒師<sub>ニ</sub>、又足<sub>ニ</sub>寺家別當<sub>ニ</sub>。望請天恩被<sub>レ</sub>賜<sub>ニ</sub>官符於太宰府<sub>ニ</sub>、補<sub>ニ</sub>任彼寺別當<sub>ニ</sub>、將<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>勤<sub>ニ</sub>仕御願<sub>ニ</sub>、仍勒<sub>ニ</sub>事狀<sub>ニ</sub>以解、

康和二年九月十九日

權都維那師嚴俊 都維那

師兼辛 寺主大法師朝秀

上座威儀師大法師慶珠

別當所律師法橋永觀<sup>(107)</sup>

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

そしてこの康和二年(一一〇〇)にすでに、東大寺は觀世音寺に対して「末寺」と称していることが、この文書でも明らかである。そして東大寺での戒壇院威師は本寺本師の夏藤次第によって觀世音寺戒壇の戒師に任命される例で、それでもって、東大寺は觀世音寺の支配を本寺として面目を保っていたであろうと考えられるが、実質的にはその支配は弱体化していったと見られるのである。戒和上、齋圓が石清水宮の光清を推した理由は彼の弟子であったことによるのであろうが、その具体的な理由は見つかっていない。

つぎに石清水別当の性格とその教学的傾向について触れてみたい。まづ寛仁年間から治安、万寿と十三年間石清水八幡護国寺の別当にあった元命が、宇佐宮弥勒寺内に喜多院を建立してより、宇佐と石清水の勢力が逆転することになり、元命はさらに宇佐宮の神宮寺である弥勒寺の勢力を掌握するために末寺末社莊園を統轄する惣檢校職に就いた。その背景には藤原道長の援助もあった。そして最澄との縁によってきづかれた宮崎塔院をも摂して、元命は石清水八幡宮護国寺別当が弥勒寺講師を六年毎に兼任し、その条件として元命は「元命謹檢案内一拜任當職之後、勤仕三所大菩薩成等正覺并鎮護國家之祈願、計其年勞及五十年也。而元命年齡已傾、且暮難期。抑以三所帶職讓與弟子古今之例也。」と喜多院を通じて弥勒寺の経済的基盤を掌握することに成功したのである。このことは光清も同様であったが、この弥勒寺講師職の譲与について権別当圓賢が庶子の寬賢にゆづろうとしたとき光清はこれに反論して、圓賢は菅原氏を称している上に、安樂寺別当の安泉の祖風を継いでいることから光清は、圓賢が自分の庶子の寬賢に弥勒寺講師を附することにきびしく反対し、告文をささげて応神天皇陵に祈っている。

維保安四年、歲次癸卯四月廿六日己酉、吉日良辰仁、掛毛畏岐、當陵御坐<sup>留世</sup>、八幡大菩薩乃、宇豆乃廣前、石清水別當法印和尚位光清、恐美恐美毛申給久、夫大菩薩、撥亂於異城之昔者、陳王業天、海内咸寧志、施化於本朝之今者、<sup>ホトコシ</sup>神威シ天、天下皆仰久、因茲天、清和天皇御宇乃時岐、行教和尚<sup>乃カ</sup>勸請尔依天、朝廷乎奉護<sup>持</sup>、男山尔垂跡禮給倍里、所以<sup>爲カ</sup>專一和尚之門徒天、令<sup>レ</sup>補<sup>ニ</sup>執務之官<sup>一</sup>。仍彌勒寺講師元命者、當宮乃所司尔補シ天、後知爲入和尚之門跡<sup>一</sup>尔、廼改<sup>ニ</sup>俗姓<sup>一</sup>天、始稱<sup>ニ</sup>紀氏<sup>一</sup>須、隨<sup>ニ</sup>法家<sup>一</sup>之日者、雖<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>尋<sup>ニ</sup>俗姓<sup>一</sup>毛、任<sup>ニ</sup>神官<sup>一</sup>之時者、依<sup>レ</sup>被<sup>ニ</sup>賞<sup>一</sup>氏<sup>一</sup>奈里、何況彌勒寺者、八幡權現之御願、百王鎮護之仁祠奈里、尤以<sup>ニ</sup>氏<sup>一</sup>人<sup>一</sup>天、被<sup>レ</sup>補<sup>ニ</sup>其職<sup>一</sup>然則元命蒙<sup>ニ</sup>長任<sup>一</sup>官符<sup>一</sup>天後者、則尋<sup>ニ</sup>氏<sup>一</sup>人<sup>一</sup>天、被<sup>レ</sup>任<sup>ニ</sup>講師<sup>一</sup>留、而故權別當法眼圓賢、雖<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>石清水別當清圓之養子<sup>一</sup>毛、未<sup>レ</sup>改<sup>ニ</sup>俗姓<sup>一</sup>須、擬繼<sup>ニ</sup>安樂寺別當安泉之祖風<sup>一</sup>志天、猶稱<sup>ニ</sup>菅家<sup>一</sup>須、雖然依<sup>ニ</sup>無涯之神德<sup>一</sup>里、浴<sup>ニ</sup>不次之朝恩<sup>一</sup>天、補<sup>ニ</sup>任講師<sup>一</sup>シ天、執行寺務乃間、堂舍乃破壊不可勝計須、恒例乃佛事宛如<sup>ニ</sup>斷絶<sup>一</sup>之、是違例之基爲、希奇之事奈里登存須留處尔、件圓賢存生之時、受<sup>レ</sup>病之後以<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>帶講師職<sup>一</sup>乃、讓<sup>ニ</sup>與庶子寬賢<sup>一</sup>之由



云々、尋<sup>二</sup>件寛賢<sup>一</sup>者、去年出家志天、未<sup>レ</sup>累<sup>二</sup>夏臘<sup>一</sup>須、齡<sup>(比)</sup>を未<sup>レ</sup>足志學須、身仁不<sup>レ</sup>帶<sup>二</sup>神官<sup>一</sup>須、被<sup>レ</sup>補<sup>二</sup>講師<sup>一</sup>尔、不堪<sup>二</sup>器量<sup>一</sup>須、爰光清既爲<sup>二</sup>和尙之門徒<sup>一</sup>、亦爲<sup>二</sup>元命之曾孫<sup>一</sup>止志天、身尔官位を窮免、齡比不<sup>レ</sup>惑尔餘禮利、本末二官を兼行シ天、佛事神事を執務せ牟事、適遇<sup>二</sup>斯時<sup>一</sup>天、尤當<sup>二</sup>其仁<sup>一</sup>禮利、是以天元命戒信清圓之先例尔因准シ天、可<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>兼任<sup>一</sup>任件講師職<sup>二</sup>由、所<sup>レ</sup>申<sup>二</sup>請天裁<sup>一</sup>也、(中略)垂跡乃慈悲遠施シ天本末二宮乃執務遠兼行須留事遠、令遂免給倍、<sup>(10)</sup>

ここであきらかに石清水と宇佐は本末二宮と立場を逆に行っていることが明らかである。このような石清水小別当の立場は、のちの宗清の告文にも見えるように「宇佐宮、石清水、香椎、宮崎、廟號雖<sup>レ</sup>異毛、根本是一<sup>(11)</sup>奈利、」とか「就中國城寺者、祖師立身之地、弟子低頭之<sup>(12)</sup>砌奈利」と見えているが、これは別当職の最初の石清水を開いた行教が大安寺行表の弟子で、その一族に真言宗の重鎮の益信がいたため、第一代別当の安宗は極樂寺を創建したが、彼の師主は東大寺直観阿闍梨で、真済の弟子でもあった。このつながりは安宗の弟子の延晟も同様で、大安寺延瓊の弟子で、次の定胤は安宗と共に東大寺直観の弟子となって南都に近づいていた。しかるに光誉が別当となつてより、彼が天台座主義海僧都の弟子であつたことから石清水に天台の学風が流がれ、元命の娘の生んだ頼清は横川の頼源大僧都に師事し、十四年間の別当在任中にもとの四王院の跡の大山寺や観世音寺別当をも掌握し、いま光清もまた天台座主仁覚に師事し、弥勒寺の喜多院、宝塔院、宮崎宮等を支配して天台宗への関心を高めていた。また頼清の譲りを受け観世音寺を支配するとともに、東大寺との関係をも保つて戒壇の再興をはかろうとしたのであつた。<sup>(13)</sup>

また一方では石清水別当と東大寺との関係は、康治二年(一一四三)十一月三十日、検校光清の三子の勝清を父として、三井寺長吏実慶僧正の姉を母として生まれた慶清は受戒を東大寺戒壇院で興福寺老賢大徳、東大寺浄能律師、元興寺仁増律師、大安寺永菅大徳、招提寺頼増律師等七大寺の大徳を戒師として東大寺で沙弥戒を受けた戒牒が残っているが、<sup>(14)</sup>また光清の場合も同様であつたと考えられるのであつて、光清が観世音寺で東大寺の承諾のもとで授戒を実施しようとしたのも、南都授戒方式にもとづくものであつたと見るのであつたのである。

ここで考えられることは石清水別当の観世音寺別当の兼任の実態は、園城寺を中心とする天台教学の影響を受けつつ、観世音寺本来の関係である東大寺との関係をも保つて行きたいとする考えにもとづく光清等の立場が明らかとなるのである。しかしそれはいうまでもなく観世音寺の本来の立場ではなかつた。

観世音寺がこの時期に天台宗に近づいたことについては、さき的大山寺、智山、安樂寺が悉く天台宗に近い関係にあつて、安樂寺別当の場合

筑前國観世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

でも菅原氏出身の増守(寺)、安圓(寺)、基圓(寺)、定快(山)、全珍(寺)などすべて天台系別当が存在し、ことに基圓等は安樂寺に食堂・温室・一切経蔵を建てるなど活発な動きを示している。<sup>(15)</sup>ことに光清が叡山と対立したのは、

件事元者、慶朝法印爲天台座主之時、依院宣、以八幡別當法橋光清補鎮西之大山別當了。<sup>(16)</sup>大山者是天台之末寺也。然間慶朝座主與本山大衆違

背、被拂山上之日、惡僧首法藥禪師執行山上政之時、推而成彼大山別當、下遣延曆寺下部并日吉社宮主法師原於鎮西、猥以執行、爰

件法藥禪師濫行彌長、被追捕之剋。又法橋光清申下宣旨、相具檢非違使廳下部、令捕法藥禪師之從類、帥卿隨宣旨、相具兵士、欲搦

惡僧等、互合戰之間、竈戸宮者在<sup>(17)</sup>大山之内云々、

ここでは大山寺がもとと延暦寺の末寺であったものを鎮守竈戸八幡宮が宇佐宮の別宮であったことを理由にして石清水の支配にうつそうとしたことによるのであるが、これは光清が園城寺系の人物であったことも、延暦寺をして追却せんとした理由であるとも考えられる。

そして光清は頼清以来の大山寺の関係を重視し、彼が大山寺別当を兼ねたのも彼が天台宗に近かったからでもあった。

このように光清はほとんど全国八幡宮の長たるの観あり、兼帯したところは竈山との関係は久しからずして断絶したけれども、弥勒寺、同寺喜多院、大隅正八幡宮の三職は確保され、宮崎八幡宮も光清の孫の慶清のときに別当に補せられて石清水は八幡の中心として、特に西国に優勢をほこったのである。<sup>(17)</sup>

このような状態において展開する観世音寺も天台の影響を受けないわけにはなかった。それは、光清のあとその影響をうけて別当になった暹宴が「観世音寺談義」と称して、天仁三年(一一一〇)六月より「定三七口之結衆、始百箇日之談義、先於三昧之佛前、祈聖朝寶祚、次談三乘之奥義、仰外朝安穩、午上即披摩訶止觀論、談定惠之法門、午後又讀往生要集、結淨土之良縁」<sup>(18)</sup>このようにに三十七人の僧侶を集めて摩訶止觀や、往生要集を談義し、暹宴は「以有智山安樂寺例、(中略)久傳天台之教法、企勸學之計」<sup>(19)</sup>とて百ヶ日六十巻の法華經の談義勸行を計画し、大宰府よりその供料として三十一石の配分を受け、談義衆十三口、勸進僧三口、講代一口、学頭一口、伝授二口、所司(三綱)六口、檢校一口、読師一口、講師兼別当(暹宴自身)の署判を集めて太政官の許可を求めている。<sup>(20)</sup>

このような談義衆には別当暹宴のほか、その一門が加わっているが、この動向は東大寺が観世音寺をその支配下に置こうとするとき、必ずしも好ましい状況を示すものではなかった。元永元年(一一一八)東大寺別当に任ぜられた寛助が二年後に観世音寺を吸収するにあたって、石清

水別当頼清・光清、およびさきの暹宴のあり方について「雖<sup>レ</sup>似<sup>ニ</sup>隨<sup>ニ</sup>本寺、已<sup>ニ</sup>有名無実<sup>（四）</sup>」という観世音寺のあり方を追求して、天台宗に流れんとするこの寺を東大寺へ吸収することこそ本来の面目を新たにすると共に、戒壇の性格からしても天平以来に復帰すると同時に暹宴等の観世音寺の私有化から防ぐと同時に、その残存所有している四封四庄を確保することに於いて、平安末期より経済的危機にあえいでいる東大寺の財政を建て直す必要から観世音寺の末寺化が、にわかには台頭し具体化されたものと考えることができるのである。

以上のことから考えて、観世音寺の存在はその構造上、別当より本来は講師、読師が中心となつてこの寺院を支配してきたことは、やはり戒壇を中心に運営されるべきであるという原則をふまえていたからであるが、それが度々の災害を受け伽藍の維持が苦しくなり、平安中期には東大寺との関係も充分に受戒を通じて連からず、さらに寺領の動揺と、安楽寺や石清水、宇佐弥勒寺等の天台系寺院の優勢の前にはどうすることも出来なかったと考えられる。そして逆縁ながらも光清による受戒の復興や暹宴の努力による戒壇院の再興は、天台的要素を持ちながらも、本来の南都への復帰を求める声も興つて来たのではないだろうか。

もちろん東大寺よりの呼びかけもあったであろうが、在地に於ける受け容れも考えなければならぬし、東大寺側にもこの寺院を復帰吸収するための必要性を検討しなければならぬが、そのことについては稿をゆづる。

いまここでは観世音寺側のあり方を知ると共にこの寺院の構造を中心として述べたまでである。

## 註

- (1) 竹内理三「筑前国観世音寺史」南都仏教 第二号
- (2) 高倉洋彰「筑前国観世音寺史考」大宰府古文化論叢下、吉川弘文館
- (3) 錦織亮介「観世音寺と不空罽索観音像」仏教芸術 一〇八号
- (4) 高倉洋彰「筑紫観世音寺の調査とその成果」―伽藍配置に関する新たな知見を中心に―仏教芸術 一三六号
- (5) (1) に全じ
- (6) (4) に全じ
- (7) 日本書紀 廿六、斉明天皇七年正月六日条
- (8) 続日本紀四、和銅二年二月一日条

筑前国観世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

- (9) 新抄格勅符抄、(+)寺封郡、筑前国觀世音寺資財帳
- (10) 統日本紀 卷二、大宝元年八月四日条
- (11) 日本書紀 卷廿七、天智天皇六年十一月一日条
- (12) 同 卷廿八、天武天皇六年六月条
- (13) 同 卷廿七、天智天皇七年七月条
- (14) 令集解 職員令
- (15) 文徳実録、仁寿二年二月八日条
- (16) (8) に全じ
- (17) 筑前国觀世音寺資財帳(延喜五年) 芸大所蔵〔平安遺文(一)の一九四号〕
- (18) 統日本紀 卷八、養老三年三月四日条
- (19) 同 右 養老五年五月六日、十二日条
- (20) 万葉集 卷第五 雑歌 七九三号
- (21) 同 右 七九四号
- (22) 同 右 卷三、三三六号、三五一号、三九一号
- (23) 大日本古文書、東大寺文書五、一〇九の九 天平三年三月卅日条〔觀世音寺文書(内閣文庫蔵)〕大宰府牒案
- (24) 統日本紀 卷十三、天平十年三月廿八日条
- (25) 同 右 卷十六、天平十七年十二月二日条
- (26) 扶桑略記抄 卷二、天平十八年六月条
- (27) 平岡定海『日本寺院史の研究』四三三頁
- (28) (2) に全じ
- (29) 福山敏男「觀世音寺研究」(「建築学研究」三三八)
- (30) 大日本古文書(東大寺文書五) 觀世音寺古文書(内閣文庫蔵) 一一二号 觀世音寺燈油料・恒例佛事料等相折勘文
- (31) 統日本紀 卷十三 天平十二年九月十五日条
- (32) (22) に全じ
- (33) 統日本紀 卷十三、天平十年三月廿八日条
- (34) 同 右 卷十七、天平勝宝三年七月十三日条
- (35) 大日本古文書 二四、(補遺一) 六〇三頁 大宰府牒案 天平勝宝元年九月廿九日

- (36) 続日本紀 卷二、大宝二年二月二十日条
- (37) 同 卷七、靈龜二年五月十四日条
- (38) 令義解 職員令
- (39) 続日本紀 卷十七 天平十九年十一月七日条
- (40) 類聚三代格 卷三 太政官符 天平勝宝四年閏三月八日
- (41) 続日本紀 卷十二 天平七年七月十二日条
- (42) 寧楽遺文上 駿河国正税帳
- (43) 類聚三代格 卷三、太政官符 嘉祥元年十一月三日
- (44) 帝王編年記 卷十一 淳仁天皇条
- (45) 東大寺要録 第四 諸院章四、戒壇院
- (46) 延喜式 第二十六 主税上
- (47) 類聚三代格 卷三、太政官符 神護景雲元年十一月十二日
- (48) 同 同 卷三、太政官符 延暦二十四年十二月廿五日
- (49) 同 同 卷三 太政官符 承和二年十月十五日
- (50) 同 同 卷三 太政官符 弘仁三年三月廿日
- (51) 同 同 卷三 太政官符 延喜三年六月二十日
- (52) 同 同 卷三 太政官符 仁和二年六月廿二日
- (53) 天台法華宗年分学生式(日本思想大系本) 一九五頁
- (54) 景山春樹『比叡山寺』三二頁
- (55) (48) に同じ
- (55) 類聚三代格 卷三、太政官符 承和四年八月五日
- (56) 安祥寺伽藍縁起資財帳(平安遺文一の一六四号)
- (57) 類聚三代格 卷二、太政官符 天長七年七月十一日
- (58) 同 同 卷三 太政官符 天長五年二月廿八日
- (59) 同 同 卷三 太政官符 承和二年八月十五日
- (60) 同 同 卷三 太政官符 承和十一年四月十日
- (61) 政事要略 卷五十五 交替雜事条

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

- (62) 延喜式 卷二十一、玄蕃寮
- (63) 政事要略 卷五十六 交替雜事 太政官符 延長五年十月廿二日
- (64) (62) に同じ
- (65) (29) に同じ
- (66) 觀世音寺封勸文(平安遺文(五)の二一四〇号)
- (67) 類聚三代格 卷二 太政官符 貞觀十六年閏四月廿五日
- (68) 東大寺文書(百卷本四三三号) 大宰府牒案 永延二年十月廿五日
- (69) 同 右 觀世音寺金堂長講僧等解案 正曆二年四月十三日
- (70) 大日本古文書(東大寺文書 五、一〇九の五)(内閣文庫蔵) 大宰府政所下文案 長保五年七月十三日
- (71) 赤星文書大宰府牒(平安遺文二の四三五号)
- (72) 類聚三代格 卷二 太政官符 貞觀十三年九月八日
- (73) 觀世音寺奴婢帳、天平宝字二年十二月廿二日(蜂須賀家文書)
- (74) (58) に全じ
- (75) (76) (57) に全じ
- (77) 大宰府牒案(平安遺文補遺ノ二) 四四六六号
- (78) 觀世音寺牒案 東大寺文書、百卷本四十五号)
- (79) 大日本古文書(東大寺文書 五 一〇九号) 吳楽田公驗案 永長二年七月十六日
- (80) 大日本古文書(東大寺文書別集) 觀世音寺談義縁起案 天永元年八月
- (81) (26) に全じ 三五二頁
- (82) 高倉洋彰「延喜五年觀世音寺資財帳」小考、一 觀世音寺蔵写本に表われた資財帳原本の脱文とその補足―(鏡山猛先生古稀記念「古文化論攷」)
- (83) 本朝世紀第廿七、康治二年七月十九日条
- (84) 大日本古文書(東大寺文書別集 一の二三号) 造觀世音寺行事所請文 治曆二年五月二十一日
- (85) 觀世音寺文書(太宰府天満宮史料 五の二〇三頁)
- (86) 扶桑略記 卷廿九、治曆二年十一月廿八日条
- (87) 東大寺文書、百卷本 第廿四卷、筑前国嘉麻郡司解案 延久六年八月二十九日
- (88) 大日本古文書(東大寺文書(東南院文書) 八五七の二) 觀世音寺三綱等解案 寛治三年八月十七日
- (89) 觀世音寺古文書(内閣文庫蔵) 嘉保年宝蔵実録日記

- (90) 大日本古文書 (東大寺文書 五ノ二三号) (觀世音寺古文書) 大宰府庁定文案 承德三年九月廿二日
- (91) 觀世音寺古文書 (京都大学所藏) 大宰府政所牒 文治二年八月十五日
- (92) 公卿補任 (大系本) 天永二年七月二十九日条
- (93) 大日本古文書、(東大寺文書 五ノ一一五号) (内閣文庫所藏) 觀世音寺三綱等解案 元永二年三月廿七日
- (94) (93) に同じ
- (95) (96) 中右記 天仁元年二月九日条
- (97) 歷代鎮西要略二 福岡県史 三七九頁
- (98) 大日本古文書、(東大寺文書 別集、一の一七の五) 觀世音寺牒案 天仁二年六月十日
- (99) (91) に同じ
- (100) 大日本古文書、(東大寺文書 別集 一の一七の二) 太政官符案 嘉承三年六月廿一日
- (101) 東大寺文書 百卷本、官宣旨案 久安三年五月十六日
- (102) 中右記 天永二年五月五日条
- (103) 大宰府政所下文 (馬越恭平氏旧藏文書) (大宰府、大宰府天満宮史料 六ノ一二九頁)
- (104) 大日本古文書 (東大寺文書 別集一の一五の三) 觀世音寺所司大衆等解案 天仁二年四月日
- (105) 東大寺別当次第 東大寺本
- (106) 東大寺文書 4 の32 觀世音寺堂舎損色勘文 久安四年壬六月十六日
- (107) 朝野群載 十六 (大系本)
- (108) 大日本古文書 (石清水文書 二) 治安四年四月十五日 太政官符
- (109) 同 右 永承二年三月九日 太政官符
- (110) 大日本古文書 (石清水文書 一の三二) 保安四年四月二十六日 別当法印光清告文
- (111) 同 右 (一の三三) 權別当法印宗清告文
- (112) (111) に同じ
- (113) 石清水祠官系図 (統群従本 二三〇頁)
- (114) 大日本古文書 (石清水文書 二の六一五) 沙弥慶清戒牒

(前略)

沙彌「慶清」<sup>(白署)</sup> 稽首和南大德主等、

竊以、三學殊途、必會<sup>ニ</sup>通於涉盡<sup>ニ</sup>五乘廣運、資<sup>ニ</sup>戒足<sup>ニ</sup>以爲<sup>レ</sup>先。是知、表無表戒務衆行<sup>(之)</sup>津梁。願<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>願心<sup>ニ</sup>祈七支之勝<sup>(因カ)</sup>。但「慶清」<sup>(白署)</sup>宿因多幸、得<sup>レ</sup>筑前國觀世音寺の構造とその性格について

筑前國觀世音寺の構造とその性格について

選「法門」未「登」清禁、夙夜剋悚。令契康治二年十一月卅日、於東大寺戒壇院、受具足戒。伏願大德慈悲、戡濟少識、謹和南疏。

康治二年十一月卅日

沙彌（自署）「慶清」

和上

傳燈大法師位「壹賢」  
（自署以下  
同シ）

(115) 太宰府天満宮文書、天満宮草創日記

(116) 中右記 長治二年十月三十日条

(117) 宮地直一『八幡宮の研究』―別当光清を中心とする石清水の勢力―一七七頁参照

(118) 大日本古文書（東大寺文書 別集 一の一五の三、四）観世音寺談義縁起案 天永元年八月日

(119) 同 右（二の一五の二）大宰府牒案 天永六年九月

(120) （80）に全じ

(121) （105）に全じ